特218-526
1200600354142
特218
526

9 023

特218
526

月の家著

日月日記

十一の卷

昭和四年　自十月廿七日
至十一月十七日

昭和天皇御即位記念
帝國圖書館藏

出口聖師と二代教主（平壌乙密臺にて）

日月日記　十一の卷　目次

昭和四年十月

廿七日　於鎭南浦朝日旅館……一頁
廿八日　於朝鮮平壤壽町三根旅館……二〇
廿九日　於朝鮮鐵道車中……五八
卅　日　於東上汽車中及高天閣……七三
卅一日　於高天閣……八三

十一月

一日於高天閣……九四
二日於敬主殿……一一七
三日於敬主殿……一二五
四日於敬主殿……一四一
五日於高天閣……一六三
六日於高天閣……一八三
七日於明光殿……一八七
八日於明光殿……一九〇

九日於高天閣……二〇四
十日於高天閣……二一〇
十一日於高天閣……二一四
十二日於高天閣……二一七
十三日於明光殿……二三五
十四日於山陰列車中……二四八
十五日於神劔別院……二六二
十六日於神劔別院……二八七
十七日於神劔別院……三〇二

日月日記 十一の卷

昭和四年十月二十七日　於鎭南浦朝日旅館

○作歌　露の部

朝鮮は早露霜の白々と地におき結ぶ朝冷たき

朝の陽は吾居間に映え庭の面に樂を奏づる小雀の群

朝日館庭の面見れば白楊樹子の年檜葉より何物も無し

朝日館朝の眺めは庭の面の木の葉における露斗りなり

海風の露吹きむすぶ鎭南浦宿の庭樹の黄ばみたるかな

朝覺めの庭の面に出てさすらへばゆるしの袖に葉露かゝりき

露すがる朝日の宿の庭の面に朝日かゞよふ白楊の枝

秋深み露けき韓の朝の野に切れ〳〵に啼く虫の音悲し

露寒きあしたの庭に佇ずめば袖吹きかへす高麗の浦風

朝晴れの高麗野を行けば草の露所ぜき迄かがやき匂ふ

高麗野原露分衣しぼりつゝ登るも樂し牡丹臺の朝

吾行けば高麗の荒野の露の色玉をかざしてむらさき匂ふ

高麗の野の芒が原に風立ちて草葉の露のぬきかをるなり

淺茅生の露のぬき糸さや〳〵に錦織り爲す韓國の秋

朝露のひかりしるけき韓國の野に玉かざす大日の影かな

高麗の野の朝の芝生に風立ちてもろくも散り行く露のあはれさ

天津日の光にうつろふ錦野の秋のあるじや露のあだもの

露の間の命ながらも朝顏の花の盛りの目覺しきかな

露の身の戀しき君のあらばこそ秋の山路も厭はしく越ゆ

きぬ〴〵の別れの袖のぬれ〳〵ぬしたふ涙は露のしがらみ

秋雨の晴れたる後に色添へて草葉に宿る露の夕ばえ

朝未明庭のおもてに狗の兒の遊ぶ小草に露の玉ゆらぐ

庭草の露の玉ゆらふみ碎き遊ぶ犬の仔勇ましきかな

月冴ゆる秋の夕べに野路行けばあたりまばゆき露の白玉

篠芒露にしをるゝたそがれは鐘の音さへ心淋しかり

吾を待つ人のありとは白露の月影踏めば心ときめく

○

朝日館露の宿りを立出でゝ鎭南浦支部さして出で行く

露たるゝ味美き朝鮮黑葡萄支部に坐しつゝ舌鼓打つ

朝露のかわける庭のアカシヤに立つ秋風の冷やかなるかな

神前の拜禮終り半切紙數十有枚書きなぐりけり

澤山に紙を用意し墨摺て待つ支部員の拔目なきかな

朝日館女中來りて晝飯の給仕なしたり支部の座敷に

秋風に十曜の神旗ひるがへり日は麗かに暖かき今日

四枚折屏風に烏七羽まで後の記念と描きけるかな

滿腹の爲にか今日の晝飯は飛び付くやうな美味の無きかな

てこ〳〵と机に近づき歌日記覗いてホット息つく蟷螂
秋日さす窓邊によりて蟷螂が目の玉斗りむいて居やがる
わる口の歌では無きやと蟷螂が目玉光らす蚊蜻蛉も共に
布袋さん蟷螂つれて草枕旅にし立てば支那戸の韓風
明光社きつての飛切り別嬪と支那の旅して巾利かしけり
滋養物斗り集めた支那料理食つても肥ぬ鎌切り連中
食堂の露西亞料理に中てられて目を落ちこます喰ひしんぼかな
かまきりが支那服つけて宣傳帽被りし姿の螳螂に似しかな

紅中字優遇されたと日本へ歸れば威張るコーマン爺かな
から國の野邊吹く風に秋草の露の玉ゆら錦に彩どる
支部前の街路に立ちて一行と記念の爲と小照を撮る
麗かな秋陽に映ゆる街路をば一行徒歩して旅館に歸る
淺茅原おく白露の道を行く袖に匂へば人の戀しき
朝露の草の葉末に瑠璃の如かゞやく上にかゞやく秋の陽
紫苑花の匂へる上に風立ちてもろくちり行く花の夕露
立秋の色こき露の芝生をばさやかに照らす夕月のかゞ

秋晴れの空高々と舞ふ田鶴の翼かゞやく鎭南浦の街
小春日の如く暖氣の漲りて窓吹く風も靜けき朝鮮
湯殿にて顏剃り刷毛を過ちて土溝に通へる穴に落せり
澄月に案内されて承仁は宿屋の風呂に垢流さんと行く
白楊の梢に秋の風立ちて鎭南浦の宿靜なりけり
吾投げし餅に打たれて二十年の腦神經を忘れし人あり
吾肱に横腹突かれ重病の神經痛症治りし人かな
御手代に觸れても忽ち御神德現はる見れば當然なりけり

行一 鎭南浦の南部 支浦南鎭

日本の内地へ歸る日は近み心の駒もはやり出したり
月中に綾部龜山兩聖地歸ると思へば何か嬉しき
土産物持ちて歸れば娘等の又善し惡しと言褒なすらむ
贅澤品と見れば忽ち五十五割關稅を取る恐ろしきかな
百圓の寶石五百五十圓稅金搾る安東稅關
內地より安價な寶石買ひ度くも稅金かければ同一となる

○

草枕人家も荒野の旅の暮れなみだの露に濡れつゝぞ寢る

吾庭の樹の下蔭におく露の玉をとらむと小猫戯むる

夕暮の秋の山路の旅枕草木の露を骨めてぞ眠る

夕されば淺茅が露も大空の月にかゞよふ武藏野の原

朝まだき芝生の露を踏みしめて通ふ山路に小男鹿の嗜く

石垣の苑の下路辿りつゝ吾袖ぬらしぬ萩の下露

萩のうへの露を惜しむか松虫の風を抱へて夜もすがら啼く

夕暮の稻葉の露に月さえて玉だれかゝる秋風の音

御佃の稻の葉のぼる露の玉とらむとあせる里の幼兒

情けある冒葉の露にひたされて小夜更けにけり有明の月

月冴ゆる夜半の山路におく露の玉しら〳〵と暉やく秋かな

黄昏て家路に歸る野の面の露に匂へる秋月のかげ

○

六時前汽車に乘らんと朝日舘あとに自動車驛へ走らす

信徒は各自に手旗打振りて我が出發を驛に見送る

天津日は山の彼方に落ちゆきて靄立ちこむる朝鮮の野邊

鎭南浦驛の櫻は紅葉して暮れゆく秋の夕べ明るし

電燈のあちらこちらとつき初めて汽車はそろ〳〵動き出したり

蒲團着て寢ねたる如き枯山の廣野の中に横たはる見ゆ
信徒がふる旗かげの見えぬ迄あとふり返り〳〵ゆく
鎭南浦驛に名殘を惜しみつゝ神子に別るゝ夕べ淋しき
廣々と魚鱗の雲波打寄せてたそがれ明し夕映えの空
十五分汽車の出發遲れたるこの夕暮の風ひゆるかな
西の空黄金の色に冴え乍ら迫り來るかな黄昏の幕
黄昏の幕は迫々迫り來て朝鮮平野せまくなりゆく
十五分貨車の都合で遲れしと車掌の各室怒鳴りてぞゆく

黄昏の秋の韓野の寂しさを包みて歸る大和神國
野の奥に一つ火見えて青山の輪廓低う闇にかゞよふ
汽車の窓ゆあとふり返り眺むれば鮮人町の灯影ながきも
硝子窓二重にうつるわが顔は大黒樣の如くふとれり
風死してあたり靜けき夕闇を轍の音の響かしゆく
闇の野に白々映ゆる物かげは蛙の宿の古池なるらん
半月の旅を重ねて漸くに今宵平壤の町に宿かる
葛川の驛にし着けば傍の小丘の上に白楊樹たつ

眞池洞驛にし着けば闇の幕明かして白衣の鮮人が立つ
遲れてももう臺城夫平壤に着きさへすれば宿が待つてる
鎭南浦行かんと昨日通りたる驛の表を岐陽また走る
月も日も山にかくれて地の上に降仙もなき夜の旅かな
大平の驛にわが汽車近づきて何の惱みも梨林檎食ふ
大平の驛を越ゆればチラ〳〵と平壤の灯の見え初めにけり
平壤の驛に降れば宣信徒神旗かざして待ち迎へ居り
安着を壽町の三根旅館二階の一室にやつと落ちつく

夕飯をしこたま食つて布袋腹撫でさすりつゝ夢に入りけり

聖師樣御渡支隨行記

岩田久太郎

十月二十七日 快晴

午前十時旅館より程近き鎭南浦支部に行き御禮記念撮影等あり、御手代御取次二十名に達し候。

旅館に於ける夜具其他の調度は全部信者により新調されしものゝ由聞き及び申候。七十餘枚の御揮毫あり、一旦旅館へ引揚げ御休憩の後、午後五時五十五分停車場に向ひ候。停車場構内の櫻紅葉に夕日の輝く樣滿洲にては見られぬ情景に御座候。列車十五分後れて發車、午

後八時前平壤驛着、前回同樣の御出迎へにて直ちに旅舘三根旅舘に入り申候。鎭南浦にての御揮毫に落款を捺し各支部配布の數を定め申候。聖師樣は御機嫌克く 五十音のロケーション歌を口ずさまれ候模樣に御座候。

今回の御旅行中 北平、濟南行を中止し、低に行程を變更せしに、長春の信者中已に御二方を御迎へせし夢を見たる人有之、二代樣は初めより西村氏等の居住する 長春には行くものと考へて居られし模樣に御座候。

鎭南浦にては寺本きぬと云ふ五十七歳の信者、一行京城より安東に向ふ三日前の朝御禮中御寫眞の中より聖師樣の御姿スッと拔け出でられしを見て アッと聲を擧げて驚き候由なるが是は正しく鎭南浦へ御出でになるものと心得、此事を兒嶋支部長に話せし由なるが 支部長より御旅行の日程を聞かされ平壤は夜間通過のみと聞かされしにも拘らず、自分は聖師樣の御出での事を固く信じて疑はざりし由なるが、御旅行日程變更の爲御巡遊御一泊の事となり、

こんな嬉しい事はないと泣喜びしての直話を伺ひ申候。此方は昨年節分祭に參綾、高熊山にて不思議なる御靈德を得られし方の由につき、序に御一報申上候。

寺本氏は二十年來左手强度の神經痛にかゝり 肩骨飛び出して變色を呈し居り一切左手は用をなさぬ程度にて其上もつと以前より腦神經に惱み居られし由なるが、高熊山にて何うしたはづみか聖師樣の御駕籠をかきし人 よろめく拍子に駕の上の聖師樣が寺本氏の左の肩を掴まれ候由にて、其時は氣づかざりしが、後無意識に兩手にて物を持ち上げて見て初めて宿痾の全治し居るに氣附きしとの事にて、現に飛び出したる肩の骨も引込み、右肩と少しも違はぬ樣になりしのみならず紫色もすつかりなくなり、かうしておひねりしても少しも痛みを感ずる事なき迄に全癒せりと二代樣の御足をさすり乍らの話に御座候。それさへ不思議なる御神德なるに 高熊山にて聖師樣御餅を撒かれし時其一つが同氏の頭に中り、それ以來多年の宿痾なりし腦神經の方も全治せしとの事に候。御餅がカーンと頭に中つた時は誰か石を投げつけ

たものと思ひし由なるが、傍に居りし人より聖師樣の撒かれし御餅であると聞かされ、それなら其御餅を拾へばよかつたと考へ乍ら龜岡へ歸り、どなたであつたか御名は知らぬが或宣傳使に其話を致されしところ、それは正しく其御餅があなたの病氣を取つてくれたのであるから、其御餅は拾はなかつた方がよかつたのであると聞かされて、成程さうであつたかと合點が行つたとの話、同じ高熊山に於て同時に二つの病氣を直して貰つたと云ふはたしかに面白き御神德と存じ候間序に御一報に及び候。

尙一行哈爾賓出發の翌日が伊藤公哈爾賓停車場に於て一鮮人の爲に暗殺されてより滿二十年に當る由に候。あとにて聞きし事故一寸追記致し置き候。

◇十月二十七日　平壤毎日新聞所載記事

王仁さん　けふ來壤す

大本教々主出口王仁三郎氏外數名は滿洲視察を終へ、二十六日午後二時十八分の南行列車で來壤、教旗をかざした信者多數の出迎へを受け直ちに平壤支部に入つたが、五時三十分の平壤發列車で鎭南浦支部に行き當地で二泊する豫定。

十月二十八日

於　朝鮮平壤市
壽町三根旅館

暖かく風さへも無き平壤の空靄かせ飛行機の行く
黄ばみたるアカシヤ老樹の枝の葉を宿の男仕がらつ朝かな
半月餘滿鮮宣傳旅行して今日平壤の宿に安居す
ぼんやりと大空靄の立ちこめて朝日の光見えぬ今日かな
骨董品間毎に飾る此の宿の主人脫俗したるなるらし
漆黑の長髯の王仁なぞと又出鱈目を書く平毎新聞

總裁の井上宣使を王仁と見て近眼記者の書きし迂濶さ
是見ても新聞記事の絕對にあてにならない事の悟らる
十時半ホテルを立ちて船橋里樂浪支部を差して馳せ行く
神前の禮拜濟ませ入千代町入木氏の支部に參拜をなす
泉町愛善會の平壤支部詣で、愛善旗印書く
平壤支部主任鈴木七三郎氏方に珍らしくも吾詠める歌の短册あり。鈴木氏の
言に依れば去る大正十四年聖地に參拜の砌吾より貰ひたるものなりと。
「遙々と鷄の林を立ち出で、日出る國の神詣でかな」

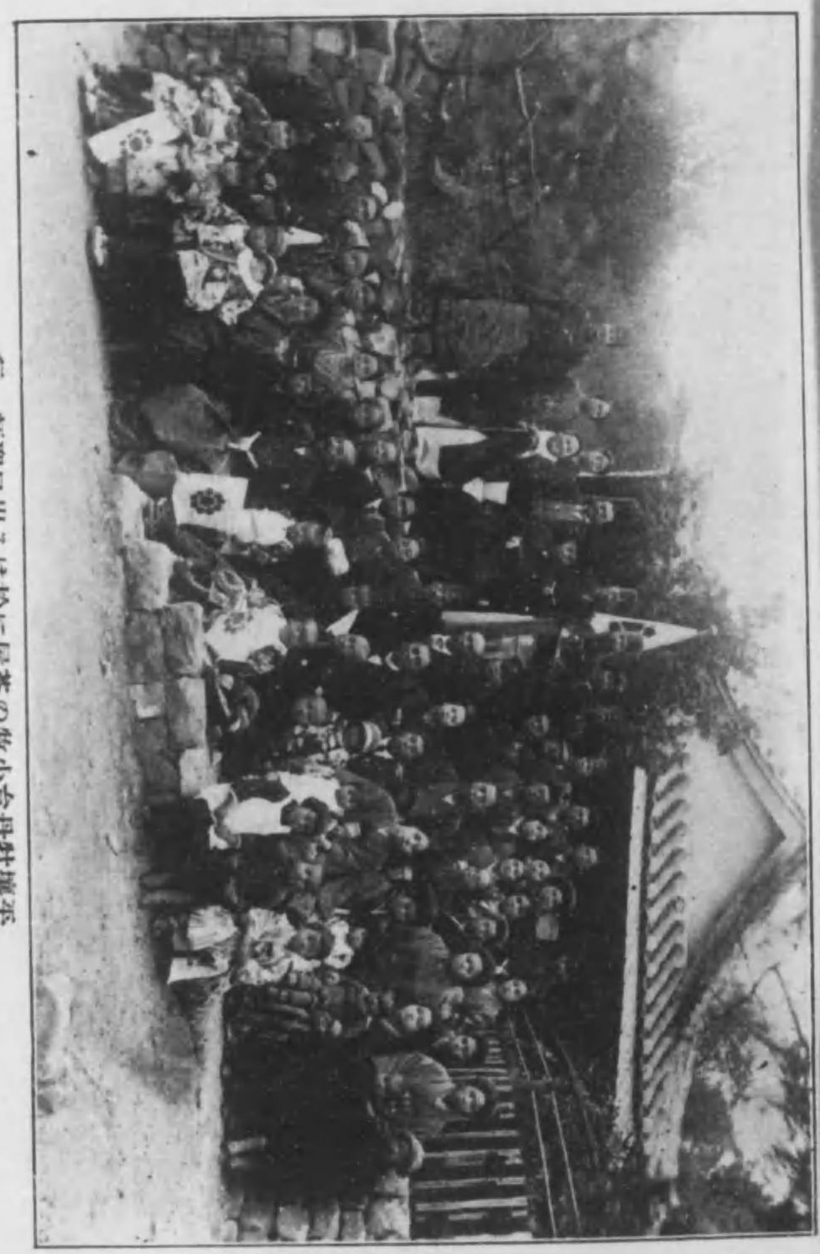
○自動車を馳せて平壤七星門潛りて乙密臺に登れり乙密臺立ちて眼下を見渡せば大同江の風景妙なり飛行機の昇降するさま面白く初めて見たり乙密臺上乙密臺牡丹臺をばパックとし二代と並ひ小照を撮る日清役古戰場なる玄武門潛り徒歩にて丹峰に登る日清の役に名高き牡丹臺浮碧樓てふ篇額のあり丹峰は老いず淵水長永に流れて清し平壤の野を

牡丹臺最勝臺をば後にして小牧の茶屋に晝飯を爲す宣信徒小牧の茶屋の庭の面に吾行共に記念撮影す大同江流れに望む浮碧樓に立ちて山河の風光を觀る石段を危ふく下り轉錦門潛れば陰巖怪しく現はる岩碧の高き表に清流辟の三大文字を刻みありけり文祿の昔時小西の行長が談判したる練光亭ありて大同江岸邊に高く聳えたる大同門の崇嚴なるかな午後三時一行旅館に立ち歸り心安けく休息を爲す

長煙管國の土產に爲さんとて朝鮮人町に岩田氏出で行く
朝鮮人愛善支部長の親族なる十九の少年伴ふ約なす
高月氏平壤支部へ講演のため午後七時出張なしたり
夕されば風暖かに犬の聲靜寂破る平壤の町
牡丹臺玄武門なぞ巡覽し話と歌の種拾ひけり
牡丹臺お牧の茶屋に晝飯をなしつゝ谷間の紅葉見しかな

○

秋の日の遠き駱駝の旅をして澄月明月淺ましけり



平壤牡丹臺の牧小舍に於ける出口聖師一行

唐國の果まで秋の旅すれど二人ゆく身は暖かなりけり

さながらに春の彌生の草枕旅に立つ身の花心かな

高くとも亦あつくともかまはない澄江と澄子の間違ひなければ

情なや一人暮しが旅をしてあついうどんを食はされにけり

ハルビンの果迄二人旅すれば天の陽氣もあつくなりけり

待ち暮らす人と一緒に旅すれば歸るともよし歸らぬもよし

やゝこしきデレ歌斗リ書かされて三根の旅館に澄月眼をむく

らちもないのろけ斗りを書かされて腹が立つなり面白くなし

吾妹子と唐國迄も旅をして顔の皺まで伸しけるかな

古の榮平朝臣が現はれて唐國迄ものろけの種蒔くきくらげの銀色なぜるをふれまはれ堅くなつたりふくれて見たり支那へ來て數多美人は見たれども生命やり度く思ふ女はなし鎭南浦に美人が居るとよく見れば遠目に見たる吾妹子のかげにこ〳〵と見ざるが如く見る如く窓にうつれる美人垣間見日の本の國廣けれど○○にまされる美人なしと思へり身はこゝに心も此處に平壤の三根の旅館に夜半の夢見るいろ〳〵とほめても褒めてもほめたらぬ○○○○美しきかな侍氣すな獨り者でも何時かまた犬も歩けば棒にあたるなり

一本の敷島莫も火をつけれや燒けてくすぼる浮世なりけりうるそても辛抱して書け歸つたらお目出度いとこ見せては遣らない國元を遠く離れて高麗の宿にのろけ歌よむ馬鹿親爺かなすまないと思へど旅の樂しさに滋繰りつゝ戀歌をよむつまらないかうてらされると知つたならついて來なんだ方がよかつた

○

主と旅すれや唐野の奥の　虎の棲處もいとはない
二人旅すれや滿洲の寒さ　霜の降る夜も暖かい
虫の好かない事ない妻と　唐の旅すれや氣が揉める

夢に現にお前の顔が　滿洲の果まで附きまとふ
留守を大事にして待ちますと　何時もいふ嫣連れて來た
憂きも辛さも皆打忘れ　唐の果まで二人連れ
緣は異なもの不思議なものよ　おかめ面でも虫が好く
けさも早よから手水をつかひ　につこり見合す顔と顔
世間の奴等が誹ろと燒こと　かまはず夫婦が旅をする
天下晴れての二人の旅を　ゴテ〳〵云ふ奴氣が利かぬ
寢ても醒めてもお前の姿　忘れた事ない事はない
平和の女神の笑窪に吸はれ　唐の果まで汽車の旅

めぐり遇うたる戀人の夢を　再び見んとて宵寢する
遠慮會釋も梨地の硯　心の丈をば書き送る
連子窓から覗いて見れば　好のお方の背ばかり
エヘン〳〵と咳して見たら　皺苦茶婆さんがこちらむく
逢うた其夜の樂しい幕を　惜氣してなく明け烏
懇し〳〵に眼を泣き腫らし　背戸の小石につまづいた
それと云はれぬ心の丈を　目と目と合して話する
年に一度は七夕さへも　遇うて一夜をなき明す
蚤にも食はさぬ我○○に　戀するお方が恨めしい

惚れた〳〵とそれや何ぬかす　馬も小便すれや地がほれる
もし〳〵貴方と美人の辭に　あと見れや豆腐屋が御用きゝ
夜更けて歸れば女房の顏に　襲來して居る低氣壓
露西亞西比利亞滿洲の果ても　駱駝で旅すれやちがよい
おいておくれやお惚け斗り　獨り住む身はぢれつたい

○

朴文浩大本へ行く事となり叔母や從兄が挨拶に來る
十二時の平壤發に乘らんとて急ぎて驛に自動車を馳す

平壤驛宣信徒等に見送られ星冴ゆる夜を歸國の途につく
オリオンの星座は東の山の端を分けて御空に昇り初めたり
何處となく輕き疲れを覺えつゝ寢むけ催す寢臺の上

聖師樣御渡支隨行記

岩田久太郎

十月二十八日　曇　天

午前十時東洋一とか稱する大同橋を渡り樂浪支部に着き御禮、次に八千代支部、次に人類愛善會支部、順次それ〳〵御禮を濟ませ平壤の勝地牡丹臺に遊び候。牡丹臺は大同江に臨みたる絶勝の要害にて青松に櫻紅葉を點綴したる風光又なくめでたし。日清戰

爭の時敵將馬玉昆の固守せし乙密臺、原田重吉の武名を擧げし玄武門等を見、牡丹臺の最高地點最勝臺に登り飽く迄絶勝を觀望致し候。乙密臺に登りし時 紗羅烏を隔てし飛行場には飛行機の飛揚盛んに行はれ、着陸離陸の狀態等手に取る樣に見え申候。乙密臺にて聖師樣、二代樣御二人丈けの記念撮影を爲し、牡丹臺小牧の茶屋にて信者一同と共に中食、大同江の鯉鮒蜆等の御馳走になり、一同記念撮影の上江に沿うて岩壁の奇勝を見乍ら昔て朝鮮征伐の時小西行長と敵將陳維敬と媾和の折衝を爲したる練光亭大同門下を過ぎ歸宿、少憩の後朝鮮町へ聖師樣、二代樣御註文の朝鮮煙管を買ひに出掛け申候、夜は澤田夫人、中溝夫人、宮澤夫人、川田夫人等御部屋の御世話を爲し、例の通り井上總裁は支部へ壇訓の話をしに行かれ、御手代御取次五名ありし旨聞き及び申候。二十六日以來福祿壽觀音樣等の半折を頂かれし方、朝日館主、三根旅館主、小牧茶屋の女將お牧さん、平壤人類愛善會平壤支部長鈴木氏、同大同支部長甲成道氏等に御座候。

午後十一時五十八分例の通り多數信者の宣傳歌に送られ乍ら平壤出發、御二人は二等寢臺へ入られ申候。

二十六日平壤支部にて御面會を得し朝鮮の青年朴文浩氏は年齢十九歳にて 人類愛善會大同支部長 親類なるが聖師樣、二代樣より內地同行につき御勸めあり、熟考中なりしが斷然同行と決心し一行に加はる事と成り申候。

宣傳使試補御新任左の如くに候。

鎭南浦支部　永田健三　貝嶋涉、平壤支部　山田政吉、八千代支部　田村榮治　清水新太郎　名越傑朗、樂浪支部　宮澤すみ　村上利信　中村照惠(澤田夫人)　以上九人。

◇十月二十八日　平壤毎日新聞所載記事

大本教主王仁さんが

神の指圖で平壤へ來た

信者達に圍まれて神の言葉

通りに平南をあちこち

大本教主王仁さんは二十五日五名の隨員を引き連れて來壤、平壤の信者百數十名は教旗を驛頭に飜して出迎へ、早速平壤の各支部を巡視し、午後五時四十分平壤發で鎭南浦支部に行つた。

二十七日夕刻歸壤、三根旅館に投宿、二十八日は平壤の信者全部を小牧に招待し、同日十一時五十八分南行で內地に向ふ豫定となつてゐる。絕對の唯

心論者だけに、王仁さんは一切日程計劃と云ふものがない。其の日々時々刻々が一人持つ神秘の驅き神の指圖によつて行動する。平壤に下車した折『汝平壤に泊つてはならぬぞよ、鎭南浦に二泊せよ』との神の指圖の手前平壤に泊ることを斷念し、鎭南浦に行つたが『汝鎭南浦には一泊で宜ろしいぞよ、平壤に一泊して其夜退壤せられよ』と二度目の指圖に豫定行動をすつかり變更し、二十七日午後八時平壤へ來ることになつてゐるが『汝平壤に一泊せず直ちに內地へ向かへ』とでも云ふ指圖があれば一泊せず直ちに退壤するかも知れぬ。

散々とした漆黑の長髯で肩を埋めた王仁さんの相貌は、一見長白山叢を汗馬に鞭打ちて疾走する絕對唯物や我利々々主義者の樣にも見えた。時々刻々フイルムのそれの如く轉換する王仁さんの行動に信者達は少からず氣に病ん

でゐるが、王仁さんの行動を一々監視する其筋のをぢさんは又『汝――ぞよ』神の指圖に惱まされ血眼となつて其行動を見逃すまいとしてゐる苦心も亦一通りでない、鎭南浦では朝日旅館に投宿したが、信者達が羽二重新調蒲團をもつて行つて一寸でもきはつて下さい。茶碗を五十個ばかり出してこれも又一寸でもいゝですからさはつて下さい等えらい騷ぎをした。同旅館ではこれが始末に非常に困つたと。

平壤府の建治及沿革概要

平壤は箕城、樂浪、西京、西都、鎬京、柳京等の別名を有し檀君以來の舊都(距今四千三百八十六年)にして昔より西鮮の重鎭たり、檀君に次いで箕子一族を率ゐて朝鮮に來り都を平壤

に置き爾來四十一世子子孫相續きて此の地に君臨せり。而して檀君時代を前朝鮮又は檀君朝鮮と云ひ、箕子時代を後朝鮮若くは箕子朝鮮と稱す。箕子四十一世の孫箕準の時代に衛滿なる者出でゝ、箕準に代り王位に即きしも幾何ならずして漢の武帝の爲めに滅び、漢は朝鮮に樂浪外三郡を置きたり。當時平壤は實に樂浪郡の所在地たりしなり。漢末に至り扶餘族の勢威漸く盛なるに及び、國を樹てゝ高勾麗(こくらい)と稱し高勾麗の東川王の時初めて平壤に都を置けり。爾後高勾麗は都を遷すこと前後八回に及びたるも平壤に都したること最も長かりしを以て、世人俗に平壤を高勾麗の都とす。高勾麗王の平壤に據るや威風四隣を壓し、余威遼東の野に及べり。斯くて國内を京畿、江原、黃海、全羅、慶尙、忠淸、咸鏡、平安の八道に分ち鷄林八道の稱を生じたる所以なり。高勾麗の治世は蓋し長壽王の時代を以て最も隆盛を極めたるも、唐の高宗の時、唐は高勾麗を伐して、都城平壤を攻略し、大都護府を此の地に置きたり。其の後多少の興廢あり、高麗の大祖王都を此の地に建設し西京と號し、成宗の時に至りて之を

西都と改む。高麗の末に妙清の亂あり、其の後幾多の治亂興廢を經て李朝に至る。太祖李氏(成桂)國を朝鮮と號し都を漢城(今の京城)に定め、平壤に觀察府を置く。而して茲に我政府は、領事分館又は理事廳を此の地に設置し、其の後日韓併合と共に、平安南道其の他諸官署を設置せられ以て今日に至れり。

平壤の地勢

平壤は東南大同江に臨み、北方大聖山を負ひ、頗る要害の地にして、兵學上の所謂戰略上必勝の地なり。さらば平壤を爭奪せらるゝと否とは、實に兩軍利害の岐るゝ所となる、宜なる哉、文祿の役碧血大同江上に漂ひ、日清の役鐵聲大聖山を震動せしめ、更に日露の役七星門外彼我の斥候初めて砲火を交へたることや、文祿、日清、日露の戰記は世上之を說きて、詳なり。

樂浪古蹟

支那が春秋戰國の世に於て、常に脅威を感じたるものは、彼の北方民族の所謂匈奴にして、漢の武帝は國土の安固を圖る爲之れと一大決戰を爲す必要あるも、常に不安の念を抱かしめたるものは、即ち側面にある衛滿の朝鮮にして、而も漢種族の獨立國が支那本土以外の地に存在せることは、雄志を抱く武帝の漢族統一の理想上、寔に忍び難きところありしことを想像せらる。然るに衛滿朝鮮は爾來漢の朝廷に入朝したることなく、其の上眞番、辰國等の漢に通ぜむとするものを常に阻抑し來たりしなり。

武帝は元封二年(距今約二千年前「我朝、開化天皇四十九年、西紀前百七年」)使者をして諭す所ありたるも衛滿は聽き入れざるのみか、却て其の使者を誅したり、茲に於て武帝は愈々朝鮮征討の寇を決し、元封三年大擧して朝鮮を攻め、全く衛滿を滅したり。而して其の地域並に附近の諸小國を併せ漢の直轄領土となし、此處に樂浪の外臨屯、玄菟、眞番の三郡を置き更に之を縣に區分し所謂郡縣の制度を布いて統治したるものなり。

樂浪郡の境域は大体に於て今の平安南、北、黄海及京畿の四道に亘り所轄二十五縣よりなる重要の大郡にして、而も我平壤は其の郡治の所在地として繼續約四百二十年の永き間、政務の中心地として威勢を振ひ文化に奢りたる個所なり、而して其の住民は主として衛滿朝鮮よりの漢族と謂ふ。

此の樂浪の遺蹟は平壤を南下して里餘の對岸土城里(大同郡大同江面)附近より發見される遺物の文字、或は群を成せる古墳の形跡且又其の發掘品等より論証して、此處は樂浪郡治の遺址たる事が明白に斷定さるるに至りたり。

土城里を中心として附近一帯に散在せる古墳は其の數夥しく大同江、龍淵、南串の三個面十四個里に亘り一千百三十基と算せられ、此等の古墳に埋藏せる副葬品は實に驚嘆すべきものあり、當時に於ける藝術の進歩を研究する好個の資料として内外人の感興を唆るもの多く土城里附近一帯は支那西漢の時代に於ける燦然たりし東洋文化の考古史料の淵叢たる重要の

地にして、四時内外考古學者の來遊多し。

平壤の戰役

文祿役と平壤　文祿元年三月朔、我征韓の先鋒加藤清正、小西行長及宗義智等京師を發し肥前名古屋より海に航して朝鮮に向ふ。

(敵兵潰走)　四月十三日先鋒小西行長の一軍釜山に上陸するや、城兵戰はずして逃散す。翌十四日東萊城を圍んで之を陷れ、梁山鶴院の守兵風を望んで奔り、行長等の向ふ所、敵なく旌旗直ちに忠州に向かつて進む。此時加藤清正は道を熊川に取り行く所、疾風枯葉を拂ふの勢あり、大軍慶州を經て直ちに京城に向はんとす。敗報葬りに京城に至り、朝廷色を失し民心恟々たり。

(國王蒙塵)　五月朔我軍平壤に迫るや、國王李昖は宰執を召し避難の事を議す。補臣曰く事既に急なり、暫く平壤に蒙塵し援を明國に請ひ、之が回復を圖るに如かずと、其夜君臣窃

に城を脱し開城に向つて逃がる。小西行長は二日夜双に艘らずして京城に入る。同日加藤清正亦漢江を渡りて京城に達す。仍ち兵を遣はして李昖を追ふ。二十九日我軍臨津江を渉り進んで開城府に殺到す。守兵之を聞き平壌に逃がる。

（平壌攻撃）　六月十日小西行長、宗義智等進んで大同江の南岸に至る。敵將李義我軍を淺灘に邀へ強兵を以て防ぐ、此日行長も亦軍を率ゐて其南に迫る。大友義統、黒田長政來つて之を援く、城中の敵兵纔かに三四千、壁上枝朶を連れ樹間戎衣を飜けて擬兵を爲し以て我軍を威脅す。先是我兵羊角島に向かひ、江岸に來りて射撃す。砲彈遠く大同門の瓦上に亂下するもの宛も雨霰の如し、此に於て平壌の地亦身を安ずるの所にあらずして、國王李昖城を出でゝ寧邊に逃がる。

（敵兵夜襲）　六月十一日我軍江岸の砂上に於て竹を結びて幕となし、累日渡江の準備をなす。敵之を望見して以爲らく、必らず夜に乘じて掩撃するならむ。

若かず、先んじて之を襲はむと、乃ち高彦伯をして精兵を領し潛に小舟に依りて江を渡り三更を期して事を擧げむことを約す。然るに時を失して軍渡れば既に昧爽なり、彦伯我兵の未だ起きざるに乘じ、進むで義智の陣を衝く、部將杉村等力戰之に死す、義智自から兵を督し、自から數人を斬る。長政敵を追うて江岸に戰ふ。此時諸兵幕聲を聽し、蹶起し直ちに刀を執つて奮鬪す、敵兵遂に支ふること能はず退いて船場に走る、船人我兵の迫るを見て怖れて舟を艤せず、爲に溺死せる者甚だ多し、余衆は王城灘より流れを亂して逃る。我兵之に由て始めて淺瀨あるを知り此夜大擧して江を渡る。守兵一矢を發せずして散逃す。我兵既に江を渉るも、城中或は備へあらむことを疑ひ未だ前まず、然るに尹斗壽、金命元等は、此時既に軍器火砲を風月池中に沈めて逃る。十二日我軍一兵をも損せずして平壌を拔く。

（明軍大敗）　小西行長平壌に在り明兵の來るを待つて一大決戰を試みんと欲す。七月上旬明の遼東副總兵祖承訓兵三千を率ゐて義州に至る。遊撃將軍史儒及戴朝弁之が先鋒たり、謂

らく此行長必ず倭軍を墨にすべしと、嘉山に至り問うて曰く、平壌の倭軍既に走るにあらざるかと、曰く、未だ退くなし、承訓大杯を擧げて祝して曰く、私軍猶ほあり、天我をして大功を爲さしむるなりと、旗鼓堂々平壌に向ひて進む、十九日夜來の風雨晦暝にして城上守兵なし。承訓乃ち兵を覺き、窃かに城墻に附し喚を冒して吶喊して急に攻む、松浦鎭信甲を環くに暇あらず、輕裝親ら出で奪鬪す、敵箭壓を貫くも顧みず、諸兵亦頗る苦戦す。敵兵七星門より侵入し直に馳せて大同門に下らむとす、我兵險阨に據り銃を發して之を擊つ、且城中路狹くして馬足を展ぶる能はず、此に於て敵兵大敗し史儒戴朝鄰及七千總長國忠、馬世隆等爲に戰死す、承訓も亦綫に身を以て逃れ、三千の明軍其生還する者は數十人に過ぎず、承訓一戰して大敗し、再び戰ふの意なく、倉皇遼東に還りて之を報ず、明廷大に驚き宋應昌をして更に謀る所あらしむ。

平壌城の激戰　文祿二年正月朔、明の援軍提督李如松、諸鎭の軍兵四萬人を率ゐ、旌旗

天を蔽ひ金鼓遠近に振ひ來つて安州に次す。平壌の敗將祖承訓も復白衣を服して軍に從ふ。朝鮮柳成龍先づ入りて見え、朝鮮の地圖を齎らして道路形勢を指示す、如松曰く敵の恃む所は唯鳥銃のみ、我は大砲を用ひ、彈丸五六里に達す、爰んぞ怖るゝに足らむやと、又總兵査大受をして、順安に來り我軍に詐はり言はしめて曰く、朝廷既に和を許し、沈遊擊爲に臻ると行長聞いて大に喜び、軍使として將士若干及通事張大善をして順安に至り決遊擊を迎ふと稱し、且彼の虛實を探らしむ、如松豫め査大受に檄し誘うて飯酒を與にし、兵を帳後に伏す、酒酣にして伏兵猝に起り、縱横突擊遂に我軍使を擒にす、行長始めて其詐謀に陷るを知るも及ばず、六日明の援軍陸續として來り進むで平壌を圍む。

如松陣を北郭郊に列し、諸將の向ふ所を定め、進むで城に迫まる。我兵約二千人は牡丹臺の高きに據り喊聲を太呼して砲を放ち、一萬余人は城上に掛列し鹿角を前に構へ盾を擁し槍を樹て兵氣凛然たり、又五千人の將士は大旗を翻し、螺を吹き、鑼を鳴らし、城中を巡視し

て諸兵を督す、又本城の内外は悉く壁に據り、險を設け敵をして仰ぎ攻むること能はざらしむ時に行長牡丹臺に在り、義智之を平壤に迎へんと欲するも、敵中間を隔つ、義智の兵單騎直ちに進みて之を行長に通ず、行長以て然りと爲し、圍を破りて平壤城に入る、如松乃ち吳惟忠の一支隊をして牡丹臺の我兵を仰ぎ攻めしむ。朝鮮の將亦永明寺の僧兵を指揮して之を勢援す、わが兵高きに據り下瞰して砲を放つ、敵兵近づくこと能はず、左防禦使鄭義賢及右防禦使金景瑞等八千人を率ゐて含毬門外(今磁門外と稱す)に陣す。我兵潛かに大同門を出で江壁を沿うて下り後方より之を掩擊す、敵軍狼狽して、潰走する者十の七八、此夜我兵三千潛かに出で、總兵楊元等の三營を襲ふ。七日夜復我兵進んで三協約營を斫る、八日敵軍大に至る連亘數里旌旗野に滿ち、西は雞藥山に據り、東は木覓山に陣す、黎明如松金鼓を鳴らして三軍を督し、一軍は七星門に向ひ、一軍は普通門を攻め、又一軍は含毬門より進み、三面繞圍、如松二百騎を領し、其の間に在りて之を指揮す、砲聲殷々として天地を動かし、大野曠漠硝煙

天地に漲り、火箭の飛散するもの恰も織るが如く、城中處々に火災起り、材木爲に焚く、我兵長槍大刀を提げ、鋒を齊うして進む、森として蝟の如く、敵恐れて近づくこと能はず、如松其退却せる一兵を斬り陣前に揭げて之を示し、自ら身を撤して先登す、李如松は含毬門より入り、楊元は普通門より進み、諸軍鼓噪して之に從ふ。吳惟忠は礮に中りて脚を傷きしも猶ほ屈せずして軍を督す、如松其の馬の斃れたるも馬を更へて進み、又譟つて壍中に落つるも忽ち起きて兵を麾き奮鬪愈々努む、我兵遂に外陣を奪て風月樓を保つ、敵何五車覘の東方に布き以て我陣を壓し、迫んで風月樓に迫る、我兵又退いて城内の土窟に入り、窟上孔隙を穿ちて亂射す。敵の前進軍悉く斃れ勢爲に逡巡す。

我軍平壤を撤去す　先時行長屢々援を他の諸將に求むるも我は兵寡く、或は道遠きの故を以て凝議容易に決せず、而して明の援軍遽かに到り、孤城重圍に陷り、奈何とも爲す能はざるに至る。此に於て行長敵陣の疎密を察し、重圍を破らむと欲するも矢石雨下して樓門

に登ること能はず、義智の兵大石茉なる者、甲冑を脱し單衿を着け大同門の高樓に登り、審かに形勢を察し之を行長に告ぐ　行長大に喜びて其勇を賞す、　此日戰ひ最も猛烈を極め、城内の殘兵漸く五千余に過ぎず、　而して糧竭き營燬け、　防守の望み殆ど絶ゆ、　夜に入り諸將行長の營に會す。斥騎報じて曰く敵軍の重圍尺地も人ならざるはなしと、　一人又報じて曰く我船結氷して動かす可からず、氷上既に騎して渉るべしと、　松浦鎭信曰く大同江氷結して既に渉るべし、而して援兵の至らざるもの或は明軍の其路を要塞するならむか、　今や援兵其到底恃むべかもず、想ふに凉山に中川の軍あり、又龍山に南條の軍あり、　我軍寧ろ一たび平壤を退き以て救軍と合し、再舉平壤を攻むるの全きに著かずと、行長曰く公の策洵に機宜を得たり、我軍今や疲弊して用ゆ可からず、　且敵を衆寡甚懸絶す。此に固守するも何の益かあむ如かず一たび退いて善後の謀を爲さむにはと、此に於て諸將其議に決し、　各々一日の糧を携へ路を分つて發し、　火を船隻に放つて行路を照らし、氷を踰んで退く、敵兵亦一人の之を追

跡する者なし、此役普通門のみ火箭蝟の如く集まるも焚けず、明人稱して神門と云ふ。

小西軍敗因　初め浮田秀家三監軍及諸將と議して曰く、今や我兵の攻むる所、敵壘陷らざるはなしと雖、若し明の援軍來るあらば之と戰ふの策奈何と、諸將皆曰く、　暫く京城に據りて敵情を視んと、獨り行長之を排して曰く、　朝鮮既に膽を奪はる、素より恐るゝに足らず縱令明之を援はんと欲するも、鴨綠江を渉ること頗る難し、予長驅北進して以て明に入るの路を開かん、　諸君夫れ宜しく意を安んぜよ、黑田孝高曰く、深く敵地に入り明軍俄に來りて之を圍まば、孤城或は支へ難からん、　我者援せむと欲するも、路遠くして緩急に益なし、又守りて棄て退かんか、異邦の笑ひを貽さん、　慮らざる可らずと、小早川隆景も亦之を諫む、行長聞かずして遂に平壤に破る、孝高曾て秀吉に言つて曰く、　行長執拗人の言を容れず、其軍恐らく敗れんと、果して其言の如し。

日清爭戰と平壤

混成旅團　大島少將の率ゆる混成旅團は、敵を平壤の正面に牽制する目的を以て、明治二十七年九月十日黄州より本師團隊に分れ、道を義州街道に取り十二日永濟橋附近に出で、敵の角面堡を占領し、十三、十四の兩日は敵の主力を中城碑街（即ち船橋里）に集注せしめ、盛に砲火を浴せ充分敵を牽制し、更に十五日午前二時部署を右翼、中央、左翼本隊に分ち運動を開始せり、右翼は午前四時頃船橋里に達し、東方の角面堡を奪取し、其一部は北進して、長城里堡壘に當り、一部は西進して、江岸に出でたるに、敵の堅固なる角面堡に衝突し、頗る苦戦したるも幸に地物を利用し死守天明を俟てり、中央隊は午前四時頃船橋里江岸の角面堡に衝突し右翼隊と合して之に當れるも敵は頑强に抵抗し加ふるに對岸の敵砲盛に我を側射し、形勢最も不利に陷り、到底陣地を維持し難きを以て、遂に後方高地に退却の已むなきに至れり左翼隊は午前三時夜陰を利用し、小舟を以て羊角島西端に渡り、更に午前六時頃を以て全部右岸に上陸し、敵兵を擊退しつゝ平川里附近を占領し、午前八時外城二里に入りしも、敵け精

鋭を盡して抵抗する爲め、我軍は一時渡河點の防禦線内に退却し、各方面の戰況の發展を俟つに至れり、斯くの如く正面旅團は他の各軍に先だち、連續四日に亘悪戰苦闘せるも、之が爲師團本隊及朔寧、元山兩支隊をして、甚大なる抵抗を受くることなく敵に接近することを得せしめたり。

朔寧支隊　立見少將の率ゆる朔寧支隊は、九月十三日國主峴南方の山地を占領し、十四日は敵情偵察と元山支隊との連絡に努め、十四日夜半運動を開始し、十五日の拂曉加現南方の丘陵に達し始めて竝峴一帶の高地に敵壘を發見し、激烈なる戰鬪の後元山支隊の一部と共に之を擊破し、敵をして玄武門竝七星門に潰走せしめたり。

元山支隊　佐藤大佐の率ゆる元山支隊は九月十四日坎北山北方に到着、翌十五日一隊を割きて朔寧支隊の一部と合し、竝峴北方の高地を奪取し、主力は坎北山の北麓を迂回して、竝峴西方の高地に出で、大激戰の後之を七星門方面に潰走せしめたるも、牡丹臺には敵の機關

砲あり、且乙密臺其の他西北一隊の城壁よりも、猛烈なる銃砲火を送り、再び大激戰となり我歩兵は砲兵の有力なる掩護の下に力戰し、遂に牡丹臺を奪取し、更に一隊は乙密臺下に進みしも、何等戰局に利する所なく他の一隊は箕子陵南方の凸出部に達せしも是亦地の利宜しからず已むを得ず、諸隊は其の位置に在て互に砲火を交換せり、然るに午後四時四十分頃には乙密臺上に白旗を揭げ、降服の意を表せしも軍使を送らず、頗る疑はしきものあるを以て翌朝入城することゝし其儘露營したり。

師團本隊　野津中將の率ゆる師團本隊は九月十日黃州を出で、大同江を渡り、一部は江西に出で、一部は堡山の西北に止りて休養す、十四日本隊の主力は夜半前進を開始し、其の一部は午前六時頃『ヨツタルマルク』の高地を占領す、此時景昌門附近の敵兵我に向つて射擊を開始し、我は鼎山東北の平野に進出せしも、此附近一帶は普通江岸にして泥濘深く進退甚だ困難を極め、一時兵を後方高地に收む。敵之を見て案山の噴門より逆襲數回に及びしも、

悉く之を擊退し、更に方面を普通門方面に變更したるも、戰局の展開を見るを得ず、依て夜陰に乘じ普通門方面より敵陣を突破するの計を定めたり、時偶元山、朔寧兩支隊方面の敵白旗を揭げたりとの報に接せしも、敵の詐術に陷らざる樣警戒を嚴にせり、此夜敵は三々五々隊を爲して城を逃げ出づ、我夜襲の一隊は普通江橋梁附近に於て敵騎の城を逃れむとするに會つて之を迎擊し、敵をして門を鎖すに遑あらしめず、尾して內に入り靜海門の守備兵を擊攘して朱雀門方面に向ひ、敗兵を追擊す、他の一隊は前隊に後るること四十分にして普通門に達したるも、既に守兵なかりしを以て、行く〳〵敗兵の掃蕩と官衙の占領を實行せり、斯して平壤は全く我軍の占領に歸し天明を俟つて諸隊悉く入城せり。

日露戰爭と平壤

明治三十七年二月二十一日午前に於ける平壤城守備の狀況左の如し。

一、第一の防禦線は乙密臺より七星門を經て萬壽臺附近の城壁と定め、第二の防禦線(最後の

陣地)を萬壽臺の高地とし、之に兵壕を構造せり。

二、軍隊は、主として第一線の守備に任し、義勇兵は主として 第二線以後の諸勤務に服せり

三、必要已むを得ざる城門の外悉く之を閉鎖し、以て勤務兵を減少せり。

四、敵兵及間者の潜入を防遏する爲城壁の破壞口を修理せり。

五、軍隊より一下士哨を乙密臺に派遣し、並峴及牡丹臺方面の警戒を爲せり。

六、軍隊より萬壽臺上に展望哨を配置し、乙密臺下士哨と守備隊と大同門連絡哨との連絡を圖れり。

七、義勇軍より下士哨を靜海門及朱雀門の兩所に出し、出入者を査問し且警戒を嚴にせり。

八、義勇隊より一連絡哨を大同門上に出し、守備隊と兵站司令部の連絡を圖れり。

九、義勇隊は韓人夫を督し城門の閉鎖及城壁の修理を完成せり。

敵情偵察 更に密偵及韓人間諜、若くは韓國官憲等に依り刻々報告せられたる敵狀左の如し

二月二十一日、敵騎約六十は既に安州に到着す。嘉山には三百八十の敵騎あり、尙後方には大部隊の續行すること。

二月廿二日、敵騎の先頭は順安に達せしが、引返し肅川に宿泊せり、又順安方面にも七八十騎の敵あり、彼等の前進するや、二十騎を下らざる斥候を遠く出して、前方の警戒に任ず一日七八里を前進しては三四里後退して宿營するを常とす。

彼等は到る所の官衙殊に郵便局を占領し、信書電報等を押收し去り、又家畜を屠り婦女を姦す、彼等亂暴到らざるなく、彼等は好んで油分を食し之が缺乏に際せんか蠟燭をも食ひしと云ふ。

諸隊入城 是より先き仁川に上陸せる木越臨時派遣隊司令官は義州に於ける東郷少佐の就綽及敵騎の南下等の情報を得るや、平壤の危急を慮り、二月十七日歩兵第四十七聯隊第七中隊(第八中隊の一小隊を加へ「約百名」)を海路海州より平壤に急行せしめ其の一部は二月二十

三日、主力は同二十四日平壤に着す。

日露戰役の第一發　二月二十七日夕、敵兵聯隊より出したる先發將校斥候（隊長以下七騎）入城す、同日夜に入り各所より得たる情報を綜合するに、敵騎約二十は坎北院に約二百、并山院峴に宿營せりと、依て守備隊始め一同は明日必らず敵騎の現出すべきを豫期し、之に對し防備を嚴にし遺漏なきを期せり。

二月二十八日朝、將校斥候は卒一を從へ、城を出で義州街道を北進し、竝峴北方に達するや敵の十四五騎に遭遇す。斥候は之を誘致しつゝ義州街道を平壤方面に退却するや、敵は我を追うて前進し、其の大部は竝峴西方高地に停止せしめ、將校一、卒一は斥候を急進して、午前九時七星門外約七百米突の地点に達す。時に彼我の距離僅かに二百米突に過ぎず、是に於て我七星門守備隊は疾驅し來れる敵騎に對し一齊射擊を開始す、彼は初めて我歩兵の城上を守備するを知り、急遽馬首を廻らして其の主力に合し、倉皇として退却せり、是實に日露戰

戰の序幕なりとす。

此日午前十一時敵騎兵約五十到着す、依つて更に斥候を繰ちて搜索せしも、彼は既に遠く北方に去りて順安以南又敵騎を見ざるに至れり。

第一軍入城　翌三月一日、騎兵第十二聯隊及歩兵第一中隊到着爾後佐々木支隊を始めとして、第十二師團の諸隊陸續到着し、三月十八日全師團の入城を見るに至れり、而して敵騎は安州以北の地區に退却し、平壤は茲に確實に我軍の占領に歸したり。

又第一軍主力たる軍司令部茲に近衛及第二師團は三月十六日頃より鎭南浦に上陸を開始し二十七、八日頃迄の間に悉く其の上陸を完ふし、其一部は平壤に宿營せり、之が爲平壤の軍隊の宿營、軍需品の調達に毛穴され日も尙足らざ　の觀あり。

駐屯軍の前進　平壤に宿營せし第十二師團及近衛師團は、三月十七、八日頃より二十二、三日頃迄の間に於て兵站部及少數の守備隊を殘し逐次北進せり。（終り）

大同江流れを染むる紅葉かな

十月二十九日　於朝鮮鐵道車上

有明の月を殘して天津日は東の山わけて昇れり

新しき家屋と朝鮮人の家累々並ぶ新村の驛

白々と地に霜おきて京城の驛にし來れば朝日昇れり

平壤より名越村上川田諸氏京城驛まで送りて別る、

京城の驛にし來れば宣信徒神旗うちふり宣傳歌に迎ふ

京城の山本宣使永登浦驛まで見送り別れて歸る

食堂に入りて朝飯喫し居れば汽車は始興の驛に止まれり

安養の驛に來れば腰に兒を負ひし鮮人乘込みにけり

二等室納まり返つた鮮人を車掌三等室に連れゆく

紅葉の林なが〳〵連なりて朝鮮平野の霜は解けゆく

紅葉の松の綠を彩りて晩秋の野の美はしきかな

松材の外に一つの貨物無き運浦塲驛紅葉の照るなり
野の面は稍ひろがりて山遠み朝日かゞやく餅店の驛
知らぬ間に水原の驛も乘り越えしを烏山の驛にてゞっと氣がつく
西井里驛のあたりのアカシヤは梢に青葉混りて立てり
眞柏の古木枝ぶりおもしろく一本のこる西井里驛
白妙の衣まとひし鮮人の馬にまたがり野路を行く見ゆ
小松茂る丘のくもとを鮮人の葬式行列靜々と行く
白々と小松の丘に鮮人の立てるを見れば鶴おりし如し

丘の上に白々石の華表ありて大樹黄ばめる平澤の驛
平澤の驛ひろ〳〵と野の面の池のおもてに天津日の映ゆ
日清の役に其名の高かりし成歡驛に秋うらゝなり
秋の田の稻を刈りたる鮮人の白々むらがる成歡の里
白楊樹アカシヤ林細々と地味の瘠せたる丘の上に立つ
風景のよき小丘よと能く見れば殺風景なる墓の列べる
天安の驛ひろ〳〵と山遠み家の秀高く秋日晴れたり
田の畔に立てる植木は悉く白楊樹のみ小井里の驛

賤の家の軒白々と鮮人の米搗く狀の原始相かな

珍らしくコスモスの花見たりけり小井里驛の路のかたへに

山下の畠に立ちて鮮人女麥の種蒔く狀長閑なり

川巾は廣く水流帶の如く細き荒川秋日に白し

美くしき小學校の棟見えて全義の驛に白衣の群れ居る

紅々と菊の花園匂ひたる全義の驛の暖かなるかも

正宗やサイダー一圓買ひ求め吾一行と舌づゝみ打つ

紅葉照る丘のふもとの小山田に兒を背負ひつゝ働く賤の女

烏致院驛の廣場に蔭おとし楊の老樹聳え立つ清しさ

とゞ松の若木の林見る間なく汽車トンネルに吸はれけるかな

日本人男女三人田に降りて大根畠に働けるが見ゆ

紅葉照る丘の上中に人家むれて秋陽にはゆる芙江の驛かな

菊畠櫻の紅葉庭もせに立榮えたる芙江の廣驛

アカシヤと楤の林紅葉して松の綠のさゆる野の村

鮮人の背なに負ひたる鉢籠にあか〳〵見ゆる林檎日に映ゆ

すが〳〵し松山波に秋日さえて鮮人家屋靜にねむる

綿包み山と積みたる永同の驛の高地の冬景色かな

鮮人の住家もあちこちトタンぶき草家に混る永同の驛

岩石の立並びたる丘の端に枝ぶりの良き老松日に映ゆ

柿の木の畠に四五本立つかげに半ば朽ちたる賤の家の見ゆ

秋風嶺最高地點に來て見れば四方を包める禿山のかげ

石材の積み重ねたる秋風嶺は海拔二千五百尺といふ

枯山の嶺高々と聳えつゝ見晴し廣き直指寺の驛

家の秀もいや高々と並びつゝ土地の肥えたる金泉の驛

野の面は見渡す限り白楊の並樹のみなる大新驛かな

川床の田面よりも高くして枯山斗り續く龜尾驛

遠の野に楊樹の低う並びたる土地のやせたる若木驛かな

大鐵橋渉れば白衣の鮮人の河岸に下り洗濯せる見ゆ

倭館の驛のおもては珍らしく柳の大樹立並び居り

構内に草花あちこち作りある風流めきたる新洞の驛

稻を刈る白衣の人かげ野の面にちら〳〵並ぶから國の秋

大邱の驛廣々と秋の陽のさえ渡りつゝ暖かなるかな

乘客の俄に增して二等室いと窮屈な心地せらるる
草臥れしまゝ腰掛に横たはり楡川驛まで眠りけるかな
楡川の驛に來れば蓼沼氏遠々迎へのために來れり
朝鐵の沿線風光同じければ歌を省きて座談に耽る
午後七時釜山の驛に着車して釜山富平町支部に走せ行く
田口愛治新見源一郎兩氏始めて吾れに面會を爲す
船中に朝鮮時報社澁谷氏在りて渡滿の主旨を尋ぬる
景福丸飯田事務長機關長船長に吾畫一枚宛贈る
海風は勢强く船體の動搖可なり上下に浮かぶ

聖師樣御渡支隨行記

岩田久太郎

十月二十九日 快晴

午前七時十分京城通過、京城信者廿餘名御見送り、平壤より同車せし川田氏、村上氏、名越氏下車、山本京城支部長乘車、永登浦驛下車、田村米子氏平壤より釜山迄同車御見送り有之候。

往路釜山京城間は夜汽車なりし爲め窓外展望の由なかりしも、復路は終日朝鮮の風光に親しみ申候。京城附近は大霜にて田畑眞白に見え渡り、隨處に黃葉紅葉の錦繡を展開致し候。聖

師様はしきりに歌を作られ乍ら『良い山があると思へば累々たる墓ばかりにて厭になつた』と申居られ、二代様は相變らず御寝みが御上手すや〳〵と安らかなる御寝息を伺ひ申候。

午後七時十分釜山着、直ちに支部にて御休憩、信者に御面會の上御夕食御禮あり、午後九時半出帆の景福丸に搭乗、御二人は一等室に、他は二等室に乗り込むと云ふよりはむしろ割り込むと云つた方が適當な位の混雜さ、矢張博覽會の影響ならんと存じ候、北平宛に字知麿様の出されし御手紙はこゝにて拜見致し候。平壤より御連れになりし朝鮮青年朴文浩君渡航につき警察の取締嚴重證明証なければ絶對に許さぬと云ふ意向らしく、平壤驛出發の際改札口にて押問答に及び、ともかくも釜山迄連れて行くとて同行せし次第にて朴君心配一方ならず、初めての旅行なれど窓外の景色も眼に止らず、食堂の夕食も喉を通らず、氣の毒な程萎れ居りしが釜山着後直ちに柳瀬氏の案内にて小生と北村氏と本人を連れて齋藤警察署長の官舎を訪問し、朴君同行の成り行き及今後の方針等を語り、將來の事に就ては決して御心配を

懸けぬ旨を誓つて承諾を得、水上署に對する照會の名刺を貰ひ、無事渡航出來ることゝなりし爲、一同眉を開き申候、御歸途平壤にて觀音様の半折を戴かれし方は、新見源一郎氏、森英太郎氏、蔚山の藝沼氏等にて、藝沼氏は見違へる程元氣な顏色になられ、蔚山よりわざわざ榆川迄御出迎への上釜山迄見送られ申候。尙平壤八千代支部の泉たつのさんは平壤より同車釜山迄見送り相成候。

釜山は二百餘日降雨を見ず斷水に近き狀態にて二千金を堵し人工電氣降雨法など試み候ひしも無効に終り、如何にして水を得るかと百方苦心中の由聞き及び申候。

◇十月二十九日　中外日報所載記事

大阪で行はれた支那扶乩の實驗

大阪古屋英學塾長古屋登代子女史は元來基督教徒であるが、天理教大本等の新興日本宗教に興味を有し仲々熱心にこの方面の研究を續け英學塾の中にも神道の神々を祀り神殿を建立するなどその凝り方は一通りでないが、今度大本の出口仁三郎氏が支那の紅卍字教の招請に依り渡支するにあたつて大阪森の宮の田中氏方に於て支那道院の人々十數名に依つて行はれた扶乩の實驗にも親しく列してこの方面の研究にも從事してゐるさうであるが、扶乩の實驗に就て次のやうに語つてゐた。

『田中氏方に集まつたのは出口氏他大本の人々及 出口氏を迎へに來た道院の支那人十數名、實驗は田中氏の座敷に祀られてゐる神前に於て行はれた扶乩に使用する器具は三尺四方ばかりの板に白砂を敷き、その上に長さ三尺ばかりの棒二本を丁字形に組んだものを置く、その丁字形の棒の上部の

兩端を道院の人が二人で持ち上げる、そしてその席に列した者は全部靜かに神の啓示を待つのである、するとその丁字形の棒が神秘的に動き出す、勿論棒を持ち上げてゐる人達は無心に眼をつぶつてゐるのである、棒は次第に動いてその下部の一端は板上の砂に文字を書き現して來る、すると參列者の一人は砂上の文字を紙に寫し取る、一人は一字が書かれる毎に砂を撫でゝその文字を消す、かういふ事を何度も繰り返す中に一つの文章が出來るのである。この文章の意味が神意として受け取らるゝ譯だ、その日の最初の實驗には山紫水明の部屋は惡いと支那文で書かれた、見るとその部屋には山紫水明と書かれた額が掲げられてあつた。而もよく見ると床の間の神棚を背にして實驗が行はれてゐたのだ、それで早速部屋を掃き清め神棚を正面にして第二の實驗に移つた、今度現れた支那文の意味は日本に神人が

ゐる、この大人物は日本には必要でないが、動亂相續く支那四億の民を救ふためには是非必要である、速に渡支せよ、斯くすることに依りて支那を救ひ更に世界宗教の統一をも成就するであらう、といふのであつた、斯くして實驗は終つたのだが、その神人が出口氏であるといふので道院の人達が出口氏を支那に迎へるために日本にやつて來たのである。両も大阪で實驗した場合も出口氏を前にしてこのやうな結果が現はれた。この實驗の結果は餘りに論がうまいので大本になり切れない自分等には少々疑惑を抱かせられるが、何にしても扶乩は興味ある心靈現象として研究に値すると思つてゐるデ々』

十月三十日

於東上汽車中
高天閣

朝七時景福丸は平和なる波を渡りて關門に入れり
九州の信徒神旗打ふりて賑々しくも埠頭に迎ふる
日清役に名をしられたる下ノ關春帆樓に入りて休らふ
内海の風光見つゝ承仁と貴賓室にて朝飯をなす
朝の九時京都行の急行に入りこみ宣信あまたと別るゝ
滿洲や朝鮮等に比ぶれば内地の山河美はしきかな

山陰線乗換地點小郡の驛にかゞやく秋日うるはし
盧俵あまた積みたる三田尻の驛の秋陽のあたゝかなる
瀬戸の海かすかに見えて德山の驛の葉櫻まだ紅葉せず
柳井驛に車止まれば知團正之夫人果物持ちて出迎ふ
暖かき麻里布の驛に宜信徒參拜の途次面會を爲す
宮島の驛に止まれば宜信徒汽車の上まで出迎へをなす
對岸に宮島大社見えながらいつも遙拜斗りして行く
廣島の驛の表に數十人宜信見送り土產贈れり

海田市驛に止まれば此處も亦宜信吾を迎へけるかな
山近み松材斗り並べたる瀬野驛柿の枝に秋更く
糸崎の驛にし入れば午後三時三十五分と時計さしをり
尾の道の驛に川田氏外二人吾のる車出迎へてあり

○道上支部杯樂氏より贈られし歌

大いなる御業を了へて歸ります聖の救主を迎ふうれしさ

○

福山の驛に宜信七十餘名神旗に迎ふ秋風清し

古の姿其まゝ輝ける福山城の莊嚴なるかな

笠岡の驛に宣信數十人吾急行車見送りてあり

岡山の驛にし入れば宣信徒出迎ふ影は百五十餘人

姫路驛に百三十人の宣信徒吾急行車待ち迎へ居り

空腹の爲辨當を買求め一息繼ぎし姫路驛かな

神戸驛約二百人宣信徒宣傳歌と共に吾行出迎ふ

大阪の驛に宣信三百餘名吾支那歸り出迎へてあり

京都驛降れば宣信數百人天恩郷人共に出迎ふ

自動車に搖られ京都の分所まで到りて汽車を二時間待てり

二條驛に井上總裁一行と乘り合ひ龜岡さして馳せたり

嵯峨驛に信徒神旗打ちふりて吾歸國をば送迎してあり

數百名の宣信龜岡驛庭を埋めて吾を出迎へてあり

聖師様御渡支隨行記

岩田久太郎

十月三十日 快晴

景福丸は德壽丸の姉妹船にて三千五百噸級なり。德壽丸の機關手長谷川氏は廣島分所次長

小山氏の息にて豫て同氏より景福丸に通知ありたる爲聖師様、二代様を優待し、一等船室を提供する事と相成申候。

航海は頗る平穏にて午前七時下ノ關棧橋に横付けとなり、九州方面の多數信者の出迎へのもとに春帆楼にて少憩朝食の後、午前九時の急行にて東上致し候。下ノ關春帆楼に於ける休憩時間は少なかりしも、歡迎の準備は遺憾なく整ひ居り候。

主　役　小倉鎮西分所　宇都宮　繁治氏（青）

受付係　宇佐支部　松本和藤次氏（赤）

送迎係　住吉支部　篠原德三郎氏（白）

荷物係　九天支部　野澤義隆氏（黄）

色別けの徽章にて役々を定めあり、集まられ！分所支部は大約左の如くに候。

山口利隆氏を初め九州別院、三六分院。

宮原支部　對州支部　佐賀支部　長府支部　太宰府支部　豊田支部　福岡分所　佐世保支部　鎮西支部　九天支部　浮石支部　小倉支部　人吉支部　若松支部　中津支部　警固支部　西市支部　八幡支部　熊本分所　八代支部　上津支部　別府分所　宇佐支部　三井支部　福岡住吉支部　久留米支部　三潴支部　博多支部　直方支部　木月支部　原支部　及び下關信者。

春帆楼は嘗て伊藤博文と李鴻章と日清媾和の談判を開きたる處にて信者方の控室として歴史ある其談判室を使用致され候。

下關より大祭參拜の爲め同車されし方は左の十七名に御座候。

山口利隆　高野圓太　松浦敎友　野滿郡太郎　能勢良吉　松本和藤治　佐渡清見　栗崎光明

衛藤襄一郎　藤本繁喜　池田實雄　石田新之輔　讃井晋次郎　石橋貫　飯田豊實　原田壽道

原田豊雄

柳井驛には知閑氏、廐里布驛には石垣氏迎送、宮島驛より海田市驛迄同車は廣岡道秋、南靖雄、秋月すみ忍の三氏、廣島驛にては丹羽分所長を始め八十餘名、吳支部、御調支部二十餘名の迎送あり、尾の道驛にては河田支部長外二名、福山驛にては百名足らず附近各支部の信者迎送、木下岡山分所長、安福大嶋支部長、田中小阪支部長、大塚稻倉支部長、山村大江支部長及び佐賀野氏等同車し岡山驛下車、笠岡驛は通過驛なる爲沿道に立ちて笠岡支部及び大嶋支部の信者迎送し聖師樣手づから果物及び菓子等を車窓より撒かれ申候。

岡山にては百五十餘名賑やかに迎送し松永氏姫路迄同車、姫路にては附近八支部より百三十名是亦賑かに迎送あり、田崎支部長及び高砂の川西氏、神戸迄同車、神戸驛には京谷神戸分所長外信者、楠支部、須磨支部、兵庫支部の信者と共に百五十餘名迎送、大阪田中鶴橋支部長及び田中相談役夫人、大阪迄同車、三の宮驛より京都大和夫人同車、京都迄御伴致され候。

大阪驛、京都驛の混雜は言語に絶し、數百名の信徒小旗をかざし人雪崩を打つて驛頭を埋め申候。京都より大和分院幹事、栗辻分所長等大阪迄御出迎へあり、京都にて一行下車直ちに分院に向はれ申候。京都へは綾部及び亀岡より日出麿樣、壽賀麿樣、宇知麿樣八重野樣、尙江樣、東尾總務部主事、櫻井總務兵他多數の御出迎へあり、十一時十三分二條驛發の終列車にて御出發、十一時五十分無事亀岡御着、電燈眩ゆき菊花壇を縫うて高天閣へ入られ往復三千五百哩の長途の旅を了へられ申候。

京都驛乘換へに際し五十餘個の手荷物積卸し積込みにつき事ら御世話下されし栗辻氏及び信徒の御盡力を謝し、各地信者の熱烈なる御迎送御歡待につき厚く謝意を表して通信の筆を擱き申候。

（完）

◇十月卅日　大連中央日報所載記事

日本浪人

奥張宗昌麾下部赴濟南

將對吾國有不利之行動

深望當局驅逐若輩出境

本月初出口王仁三郎率一羣日本浪人不動羅息僧張宗昌部下等祕密搭船赴濟南而去

他們中日不逞之徒赴魯作何陰謀於吾國有不利行動不待言也深望政府當局以及黨部民衆隄防驅逐其出境以免危害我國也

十月三十一日

於高天閣

朝の空曇りたれども雨もなく菊の香高く風かをるなり

吾筆の書に十二首の自讃歌を書きしるしたり左に誌すべし

○

やつかいもの天窓に乗せて浮世川やすゝわたる布袋腹かな

八方を睨みまはして緊縮で上から下までだるまさんぞや

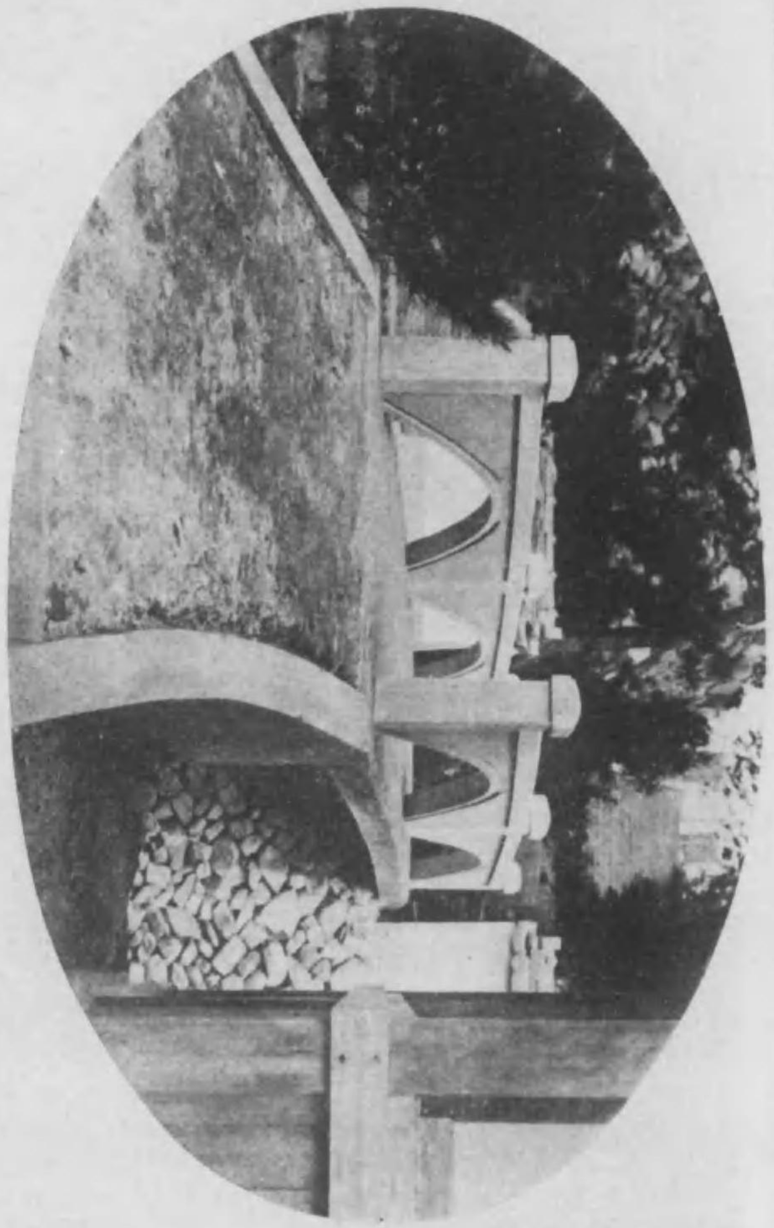
畑を打ち小判うち出す槌なれど野良九樂ものゝ天窓打つ槌

久方の天の八重雲かきわけて地上に降る伊都能賣の神
蝦で鯛釣る蛭子顔にこ〳〵と只一筋の糸で世わたる
雷公も怒鳴つたあとは地に降りて一汗流す五右衛門風呂かな
大原女も二八の春の花ごゝろ眼もと怪しくものを言つてる
外すぼり内鼾慶の強い事半鐘の嫗を頭にかつぃで
琵琶法師闇の浮世を渡り行けば尻からいぬが嗅ぎ付けて來る
一本の杖を力にやす〳〵と浮世をわたる太つ腹かな
大國主も一度は溪流に舟を漕ぎ流れ〳〵て大洋に入る
半世をば地下に埋めて半世をば輝きわたる隻履の達磨

○

神苑を廻りて見ればコスモスは盛り過ぐれど菊は匂へり
大空は曇りたれども幸ひに雨なくかをる菊の花園
土産物信者の家に配るべく拇印を捺して準備なしたり
稗田野の大石老翁珍らしき柿と松茸贈られにけり
山口師發熱と聞き高殿に立ちて遠隔鎭魂を爲す
智照館工事漸く落成し明光社にて受渡し爲しぬ
明石橋落成を告げ王仁一人いと簡單なる初渡橋せり

寄宿舎を建造する音刻々に響けど往き見る寸暇だも無し
明光社到りて見れば吾描きし山水の額出來上りありき
黄昏れて神苑俄に風さわぎ高天閣の玻璃戸を叩く
夕さりて八十餘名の面會者に一々短册描きて送れり
今日よりは神勅により短册を描かぬ事と定まりにけり
入蒙後始めての吾渡滿に對し中華民國の當局者をして驚愕せしめ、且つ新聞紙をして中傷的吾記事を掲載せしめたるは實に痛快の至りにして男子の本分是にて足れり。嗚呼吾一指を動かせば東亞の天地震動し一足を投ずれば人群萬類



極石明樂屋天

競つて吾に來る。一時は天下の嘲笑の的となりしも天運循環忽ちにして英雄となり、聖雄と呼ばれ、總ての階級の人士より望を囑さるに至りしも、全く吾隱忍と熱心と持久的大々活動の收穫なりと謂ふ可し。

吾曾て蒙古に入りて國民をいつくしみたる眞心酬はる
男子てふものの力のありたけを盡して吾は蒙古に入りけり
滿蒙の現時の狀況ながむれば安閑坊としては居られず
滿蒙の吾同胞の困窮を救はむとして吾は渡支せり
牧野氏やセミノフ將軍其外の計畫吾れは危ふしと見る

吾言に從はざれば成功する事も忽ち不結果となる
軍資金取りのセミノフ張宗昌餘り油斷の出來ぬ人物
愛善の教は御國の外までも吾名と俱に擴まりてけり
紅卍字愛善會の合一は東亞の時局を救ふ鍵なり
曾て未だ試みし事なき日支間の心の提携遂げし吾かな
國民政府蔣介石の旗色も色褪せ初めて木枯寒し
神界の經綸の妨げする奴はかならず亡びの淵に飛び入る
日本に生れて日の本知らぬもの多なる現代救ふは神の子

近眼的政治家連のはびこれる吾日の本のわざはひなるかな
百年の大計おろか明日の日の事の判らぬ日本の政治家

◇十月三十一日　大阪毎日新聞所載記事

滿鮮の旅から

王仁氏歸る

鮮人青年を土產にして

先般來朝の支那宗教團體紅卍字會員十八名の見送りかたゝ朝鮮經由ハルビン、長春、奉天の各地を巡遊、紅卍字會員との親睦を厚くする一方、大本教の布教につとめてゐた出口王仁三郎氏は、夫人並に隨員五名のほかに鮮人

青年に内地教育を施し人材を養成するといふ目的で、平壌から連れて來た鮮人青年一名を同伴、卅日朝關釜連絡船で下ノ關着、北九州各地からの信徒に見送られ、同九時發綾部に向つたが、王仁三郎氏は語る——

『支那は北平まで行くつもりだつたところ車夫のストライキ事件があつたので見合せた、紅卍字會との親交は日に〳〵厚くなるばかりで、かの地でも諸所で歡迎を受けた、今度は歸りがけに鮮人青年をつれて歸つたといふみやげがあるばかりです。』

◇十月三十一日　北國夕刊新聞所載記事

日支親善のクサビを打つて

出口王仁氏歸る

支那にては活佛

以上の歡待ぶり

大本教の出口王仁三郎氏は、過般渡訪の支那道院(紅卍字會)幹部十八名の一行に迎へられ、二代教主その他幹部と倶に渡支し、五大教と大本教、紅卍字會と人類愛善會との完全なる提携が成立し、到る處に於て「彌勒佛」道名等仁として活佛以上の歡待を受けてゐたが、今回の渡支は神界に於ても現界に於ても非常な使命があつたさうで、精神的には日支親善と東亞經綸の上に深い意味があつたさうだ。斯くて一行は安東、奉天、長春、哈爾賓を經て下ノ關に安着し内地に於ては各驛毎に宣信徒の熱迎を滿喫し、溢れる許りの元氣さを見せて、今三十日京都府綾岡町の法城へ歸還した。

◇十月三十一日　關門日々新聞所載記事

怪氣焔を揚げ

王仁三郎師一行歸る

卅日滿洲から歸關し

多數信者に見送られて綾部へ

大本教主出口澄子二代樣及び聖師と稱せらるゝ王仁三郎師は、井上同教總務及び岩田宣傳部總務、以下隨員四名と共に卅日朝滿洲から着關、春帆樓で朝餐を撫り、小旗を手にしたる多數の宣傳使及び信者に見送られて綾部に歸山したが、一行は交々語る。

『關東大震災の見舞品贈受を機會に一脈相通じた支那各地の紅卍字教道院代表十八名が來朝したので、其の歸るのに同伴して渡支、安東、奉天、北

京、濟南を一巡する豫定であつたが奉天から行程を遽かに變更して、長春及び哈爾賓まで行つた。長春には吉長線の吉林、敦化、四洮線の鄭家屯、通遼、洮南、哈爾賓には東支鐵道西部線の齊々哈爾、滿洲里、同東部線の海林及び穆林方面の奥二百哩の地点からまでも紅卍字教の布教師及び信者數百名が出て來て歡待至らざるなく、一行は連日支那料理と露西亞料理攻に遭つた。我國の神懸り、又は大本の御筆先と同樣な扶乩と稱するものが紅卍字教にあり、兩教交驩に當り之を試みられたが、二人で兩端を支へた棒の中央に吊された乩筆は、支持者が憑靈狀態に入るや動搖して砂に『大本教は最も秀でた宗教で、將來全世界の信仰を其の傘下に集むべき使命を帶びてゐる。布教關係者は努力すべし』との文字が記されたのには驚いた云々』

十一月一日　於高天閣

朝風の吹きのまに〳〵高殿にかをり送れり白菊の花朝寢して起き出で見れば大空に輕くおよげる魚鱗の雲かな純直日八重野尙江と午前九時綾の高天を指して上れり園部より藤坂博氏上仲氏愛善會につきて來れり額二面書と畫をかきて明光社口と奥とにかゝげるかな三雲氏を案内として大宮氏今日の畫過ぎしのび來れり

がらくたの大工がたてた智照舘いや〳〵乍ら落成式なす玄關と門口の區別知らぬよながらくた大工は使はぬがよしがらくたの大工も大工監督も監督せねば間に合はぬ哉金ばかり澤山とつてがらくたの建築をするがら大工かな廿日餘り旅して神苑に歸り見ればコスモスは散り菊は咲いてる廿日間留守の間に菊ばかり進展主義を實行してるぎよろ〳〵と目をむき出して各自が光るこ〳〵ばかりいうてる鴨雀料理をせよと命ずれば影さへ見せずなりにける哉

藤坂氏贈り來れる雞一羽腹たちまぎれに料理してくふ
わけ知らず今日一日は腹たち　見るものこと〴〵癪にさはれり
目と目とを合すはおろか鼻と鼻しやくつてもの言ふ名人もあり
宣傳の旅を終りて梅田宣使今日黄昏に話してゆく
栗原氏腰がいたいといひ乍ら細い目をして訪ね來れり
春陽亭秋月亭の設計圖大國主事補に渡しける哉
たそがれに懐中電燈かゞやかし寄宿舎地盤工事みし哉
安生館階上階下くまもなくまごと〳〵にのぞき見しかな

安生館無精な奴のみ集まりて亂雜至極な蒲團の積み樣
塵拂ひ箒の一つも使はぬか階上階下塵まみれなる
寄宿舎をまはりて見れば異樣なる臭氣がぷんと鼻をついたり
安生館なまくらばかり集まりてこけた箒も起さぬと見ゆ
天恩郷集まる若い宣傳使言心行の腰がぬけてる
天聲社工場巡りてしらぶればほこり捨場の感じするかな
澤山の技手集まりて今年は去年に劣る菊を作れり
魂のはいつて居らぬ園丁にろくな花咲くためしあろなし

瑞祥閣到りて見れば用のなき間に電燈を輝かし居り
會計と冥加を知らぬ役員は神の目からは罰當りなり
三文の神樂獅子にも似たるかな口ばかりにて腹のなき人
何人の家に飼はれしめん猫か友をたづねて文殿に來る
樂燒の茶碗は白粉つけたまゝ平氣な顏で棚に乘つてる
明光社美人宗匠もこの秋は洗濯ばゝあとなりにけるかな
又しても洗濯物をとり入れず夜露にさらす心なしかな
二度三度いうた位できく樣な素直ものなき天恩郷かな

高天閣話もろくに出來ぬかな駄賃とらずの飛脚がをるので
雜木は澤山あれど神の宮の柱となるべき良材少なき
つばくろや百舌鳥や雀が集まりて秋の花明山騷がしきかな
目と目とでものいふ奴がごふを經て鼻と鼻とで話するなり
草深きへつぽこ谷の穴太から來た大工ならろくな事せぬ
玉の井の普請もあんな大工ならもう使はぬと決心せしかな
約束の玄關もつけず金をとるがらくた大工あいそがつきたり
人情にひかれてがらくた大工をば使ひし事を今更悔いぬる

約束の瓦で屋根をふかずして塵紙のよな石で屋根ふく
月宮殿のぞいた外は瓦にて屋根ふく定めをガラが破れり
暫定的假工場や温室は是非なし腹たつ智照館哉
花明岡に瑞祥本部の移りてゆ上から下までだらけ氣味なり
日に月に迫り來れる世の中に風呂で屁をひる樣な講演
もう少し活氣がなければ刈菰の亂れたる世を如何に開かん
大祥殿講演會の開けてゆ講演らしき講演を聞かず
大祥殿外から講演聞き居れば辛氣くさゝに眠たくなるなり

神樣の心も知らずめい〳〵に我田引水說ばかりいふ
氣に入らぬ風もあらうに柳かなと名句はあれど柳になれず
腰のなき奴は柳を手本とし松と梅との心を知らず
人一人居らざる智照館內に世帶知らずが電燈つけてる
たちむかふ人の心の見えぬよなのろ宣傳使道汚すなり
逃げ腰になつてる人にくど〳〵と大本話する馬鹿もあり
明石まで出て來て居乍ら好機會はづして一汽車先にしら石
月も日も同じ姿と滿洲で感心してゐる山の神かな

回「門」第六輯十一月より

出口さんの人間味

南江二郎

出口さん！

さう呼びかけることが、今の私には一番自然だ。かうした親しげな呼びかけの中には、私の僞りのない、濁りのない、出口さんに對する畏敬の念も、懷しげな心持も充分含むでゐる。

大本の内部では出口さんを聖師様とも云ひ、先生とも云ひ慣はしてゐる。その人達にとつてはさう尊稱する事が一番自然なのであらう。なんでも自然なのが一番いゝ。だから私は私なみに、

出口さん！

と呼びかける。

○

出口さんに親しく會つて話したのはたつた一度きりだ。

私達の郷土の有志が集つて、この春から、丹波文化協會と云ふのを作つたが、その秋季總會に、たま〳〵松江市で開かれる小泉八雲追悼講演會にのぞまれるヨネ・ノグチ先生を迎へて、去る九月二十五日に「詩歌の日本主義」と題する講演をしていたゞいた。その節、野口さ　は本論に先きだつて、

「……縁と云ふものは不思議なもので、若し南江君が居なかつたら、おそらく私は今日こゝへ來なかつたでせう……」

と云はれ　。全く縁と云ふものは不思議なもので、おそらくその日、野口さんが龜岡へみえなかつたなら、私は一生、出口さんと親しく面接する機會を

得なかつたかも知れない。

女學校でその講演會が終ると間もなく、私は協會の代表者山田弘君と共に野口先生のお供をして、大本から迎へにさしまはされた自動車に乘つた。現代、大本の天恩郷となつてゐる舊龜山城趾と、その内濠を隔てゝ向ひ合つてゐる女學校とは、二町と離れてゐない。で、私達はすぐ「光照殿」と云ふのへ案内された。その玄關には舊龜山城門の扁などが揭げてあつた。

○

光照殿ではその數日前から 聖師出口王仁三郎氏の作品展覽會を開いてゐて日曜日にはこれを公開してゐた。これを先づ御覽下さいとの事だつた。

作品は書畫、陶器及び短冊の和歌を合せると、數百點に及んでゐた。私はこゝで、お世辭のない卒直な印象を述べておくことゝする。

出口さんの作品は、出口さんの、口眞似をして、「出口さんの畫だ、歌だ陶器だ」と云つておくのが、一番、無難かも知れない。然し、若しこゝに美術月評家並の言辭を弄するとすれば、それは素人の藝術でもなければ、玄人の藝術でもない、と云ふより外はない。

曾つてゴオギヤンはマオリ族の作品を見て「立派な裝飾藝術だ」と叫んだ。又、マチスは或人から、「あなたの繪は、お孃さんのお描きになつたものと**そつくりだ**」と云はれた。然しマチスは如何に追究しても、子供の繪の簡素潑溂には及ばない事を告白してゐる。思ふに子供の繪には、天眞の流露とか製作動機の緊張とか、表現の純粹、單純素朴とかゞ、畫面に溢れてゐるからであらう。勿論、そればかりでは眞の藝術は創造し得ない。然しさうしたものが、畫面いつぱいに潑溂として流動してゐると云ふことだけでも、無感動の

まゝ、單なる技巧のみで筆を弄してゐる惰性の玄人の作品よりも、時に遙に强い力と光を發する。こゝに往々世人の謂ふ素人の作品の面白さがある。曾つて巴里のアストラツグ街、ギャルリイ・シモン貴商店で催された無名美術家（レ・ザルチスト・アシコニュー）の繪畫展覽會が、異常なサンサシオンを與へたのもその爲である。たゞ素人と玄人との差は、前者の面白さがまぐれあたりであるに反して、後者の立派さは金的を射中した不朽の藝術的價値を持つてゐると云ふ事である。

出口さんの畫は素人のものに近い。然しその得意だと聞く觀音圖などにいたる程、玄人的臭味がぷん〳〵としてゐて、自分が限りなく敬慕する出口さんの天心童心が殺されてゐる。玄人としての完成など出口さんに問題でないのなら、むしろ、そんな中途半端なものは斷然これを捨てゝ、本來の童心に還へつてほしい。なぜならば、さうした中途半端が、皮肉にも、出口さんが「

大津繪」を題材とせられたものなどに、上手（うま）さを澤山に殘してゐると云ふ、實に悲しむべき現象を示してゐるからだ。

私は曾つて歌舞伎所作事「大津繪」を作つた關係から、大津繪には可成接してゐた。出口さんの大津繪には、その私の眼にもうまいと感ぜられるものが數枚あつた。

大津繪の美は傳統の美しさだ。類型の美しさだ。法則の美だ。法なき所に眞の自由はない。その意味で大津繪を愛する事はいゝであらう。又、大津繪の美は、多く描く所から來る美しさであると共に、民衆に依つて持續された美しさだ。その美しさを出口さんの數枚の大津繪に見出した事は喜びだつたが、他の數千枚の大津繪は「だるまや」あたりから刊行してゐる版畫同樣、筆致が死んでゐるものが多い。法なき所に眞の自由はない。反面、法に墮する

とき眞の自由はない。悲しむべき現象とも云ひ、出口さんの作品が素人のものでなく、玄人のものでないと云つたのは、これを指示するものである。

出口さんの自作の陶器に就て、近在の信者の或者は、その茶碗などの底に出來る豆粒程の凹み等に神祕を傳へてゐる。が、永年支那で修業し、今も尙大連にゐる陶器の研究家を友に持つ私は、たゞ、其處にかうした所に往々起る傳說發生の起因を微笑を持つて發見するだけである。たゞ面白い事は確に面白い。

然し之等の製作が、單なる出口さんの餘技であり、樂しみに過ぎないと云はれるのなら、問題でなく、かへつて、それを眞正面から批評してゐる私が如何にも雅氣に富んだものとして、殘るだけである。

○

かうした勝手な雜感に耽つてゐる間に、大本の宣傳部長をしてゐる方が來て私達を庭傳ひに高天閣の方へ案內して下すつた。高天閣は出口さんの常住の場所となつてゐる所だ。間もなく私はそこで出口さんに會つたのだが、それまでに私は三度、微笑を洩らしてゐる。

第一は初めての客を遇するに先づ主人の作品を見て下さいと云はれた時だ

第二は庭傳ひに高天閣に行く時、偶然だつたかも知れないが、光照殿の奧から數分、ピアノの音が聞えた時だ。

第三は、高天閣の古代めいた殿上に登つて、內部は今樣文化のけば〳〵しい應接間に通されたとき、その華麗な室內にずらりと、數種の圓本全集を眺めた時だ。

○

なんと云ふ現代的なユーモアの滿ち〳〵てゐる事だらう！

ユーモアと云へば、出口さんの服裝も、實にすばらしいものだつた。お相撲さんのやうに肥えた出口さんは、髪を異樣にとゝのへ、着物は四五才の童子が着る大柄のものだつた。私は瞬間、古代大和民族の何處かの領主にめぐり合つたやうな愉快さを感じた。

その出口さんは、すぐ出て來ると、改つた初對面の挨拶などまるで拔きにして、

「こつちい來てもろてんか」

と、生れ故郷の、この邊の方言まる出しの言葉で、自分の居間へ招じ入れると云ふうちとけやうだつた。

野口さんは、終始　沈默勝ちだつたので、自然、私が話し相手になつた。

が、宗教的な話しや、思想的な話しは殆どなく、たゞ僅に、最近、大本が結むだと云ふ支那の道院の話しが出たくらゐのものだつた。これとても、現在大本にゐる京都の詩人小田秀人君から聞いてゐたので、私から持ち出した話しに過ぎない。この席で初めて、道院特有の扶乩に據つて現はれたと云ふ乩示を見せてもらつた。また、他の部屋の床に懸つてゐた、出口さんの筆になる大幅の「觀音圖」を見せて頂いた。その時、出口さんは、それを指さしながら、

「この觀音さんの足が長すぎますやろ。わしはまだ生れてから、一つぺんも觀音さんを見たことがないのや。これはわしの觀音さんや」

と云ひ、その兩側に懸つてゐた肖像畫に就て、

「これは違ひます。これは專門家が畫いたんです。わしが何べん畫いても、みんながちつともわしに似てへん云ふさかい、肖像畫だけは畫かんことに

しましたんや。」

と、云つて、自分から先きに笑ひ出して、大笑ひになつた。

其處には、一點の虚飾もなければ、いさゝかの心構へもなく、腹からまる出しの赤裸々があるばかりだつた。一見、それは、

阿呆かいな！

と思はせるほどの、大童のおもかげがある。然し、反面、其處には、

則天去私

とも云ふべき、朗らかさがあり、豊かさがあつた。

○

其處に出口さんの、この上もなく尊い人間味がある。私が初對面にして、出口さんを懐しくも思ひ、畏敬をさへ感じるのは、この尊い人間味を慕ふか

らだ。

この人間味の中には、おのれを「無」として初めて得る「有」の世界がある。

古代から、あらゆる宗教の偶像は、その材料乃至形像の如何にかゝはらず總ては「生命」なき「無」なるものでこれを信仰する者によつて初めて、「有」なるものとなるのだ。

出口さんを偶像化したものが、また、今も偶像化してゐるものが、何んであるかは知らない。

然しそんな事は問題でない。

出口さん自身も、初めはともかく、今ではそんな事を問題外にして、おのれを「　」にして、初めて得られた「有」の世界を樂しみ、その樂しさを友に分かつ爲に、おのづから集る友と接してゐるのではなからうか。

大本といふもの、乃至、人類愛善會と云ふものを、一つの對象とせず、出口さん一人を對象とする時、私はそのやうに考へる。

信仰の爲に、一つの對象があると云ふ事は便宜であり、又、一つの對象を持つと云ふ事は、實際上から云つて必要な事であらう。然しそれを大本に限る必要はない。私達の目ざす道はたゞ一筋なのだ。

この事は出口さんも百も承知の事だと思ふ。この意味に於いて、鄉土が生んだ私の先覺者として、又、友として、何等のへだてのない交りが願へれば私にとつてこの上もない喜びである——昭和四年十月下旬、龜岡にて——

◇十一月一日　大連中央日報所載記事

日邪教主竟來東北煽惑

大連特訊

△以濟南紅卍字會爲大本營

△作反抗中國國民黨之工具

夢想設新中華王國

日本邪教大本教主王仁三郎、近率黨徒十餘人、潛入東北各地煽惑中國紅卍字會幹部、與彼聯合計畫、夢想設新中華王國於中國北方、連日頗形活動、並聞不日將赴平津各地遊說中國資產家、加入其團體、以濟南紅卍字會爲大本營擬以慈善機關爲反抗國民黨之工具、按王仁三郎、即前因利用匪首盧占魁擾亂西北及東北各地被張作霖拿獲驅逐出境者、今復來中國、陰謀煽惑其有無重大背景、殊堪注意也云云。

◇十一月一日　華北日報所載記事

日本邪教主之活動

大可注意

煽惑慈善團抵抗本黨

已潛入東北將來平津

據大連消息。日本邪教大本教主出口王仁三郎。近率黨徒十餘人。潛入東北各地。希圖煽惑中國紅卍字會幹部。與彼聯合。夢想建設新中華王國於中國北方。連日頗形活動。並與王仁三郎不日將赴平津各地遊說中國貴族階級。加入其團體。擬以濟南紅卍字會爲大本營。並欲聯絡各慈善機關爲對抗國民黨之工具。按王仁三郎前因利用匪首盧占魁擾亂西北及東北各地。被張作霖拿獲驅逐出境今復來中國。陰謀煽惑。其有無重大背景。殊堪注意云。

三民主義これぞ眞の邪教なり

於教主殿

十一月二日

朝未明起き出で神苑ながむれば白菊かをる高天閣かな

月宮殿神籬檜下枝は紅葉しつゝ朝風すがし

和妙の綾の聖地の大祭に參拜すべく朝八時立つ

宇知麿や壽賀麿始め御田村氏其他の宣信共にのり行く
入木園部殿田の驛ものりこえて六百呎の胡麻につきけり
胡麻の驛過ぐればいよ〳〵下り坂汽車の脚並迅くなりたり
下山や和知驛山家のりこえて本宮山下に紅葉見しかな
綾部驛下れば宣信例の如ブラット埋めて吾を迎へ居り
宣信徒いや次ぎ〳〵に訪ひ來り忙しきかな敎主殿内
午后一時白衣の人に迎へられ五六七殿へと上りてぞ行く
至聖殿二代三代相共に目出度秋の祭り終へたり

世界紅卍字會南陽分會よりの書信二通左に記入す。

○

敬啓者敝院會創設已七載矣因地處要衝兵匪横行兼之連年荒旱同人星敬影響所及
道慈不免停頓茲幸各道友均已先渡歸里秉承
師訓力加整飭遂租定龍庭門吉宅四十餘間於八月九日正式遷移同人等自揣棉薄恐
負
師恩尚望
貴院會諸先覺哲猷時頒匡我不逮是所至昉如蒙
賜函請逕寄該處可也專此順頌
道祺

八、二四

別信

尋仁宗道長鳴鑾久慕
玄風炙
敬無由東望
扶桑嚮往時般第驚鰲身之映天黑雲無際逢魚眼之射波紅光普照諸道長靜坐觀心其
樂可知同人等步武情切鞭石難通等諸神僊三島可望不可即已耳
南陽道慈雖重整旗
皷勢同肇造願開
師道之眞諦端賴
先達之好音欲借光

土國價我夙志取石他山奠此新基不勝翹企待命之至此頌道祺

陳靜一
王育定
喬惟普

十月十日

○

大祭も無事に終りて月光閣に到り山水の畫五枚描きたり
珍らしき秋日和にて大祭も歡呼の內に終了告げたり
今回の支那に旅せし感想や紅卍字會實況話せり
井上氏演壇に立ち日支人の親睦和平の急務を說けり
隆光氏吾歌日記一同の前に逐次朗讀を爲す

面會の宣信次ぎ〳〵詰かけて寸暇もあらぬ今日の一日
寸閑を窺ひ本宮山に上り穹天閣の工事見しかな
待ち佗し人は秋の大祭に詣で來らず如何なせしか

昭和四年大本大祭概況

自 十一月二日(舊十月二日)
至 十一月六日(舊十月六日)

大祭第一日　十一月二日

綾　部

昨日來の雨も今朝は全くからりと晴れて、麗かな小春日和で、近來の大祭に見た事無き迄の快晴であつた。 準備萬端遺憾なき神苑はいやが上にも活氣を呈し、流石に信徒の面には包みきれぬ歡喜の色が充ち滿ちて居た。 此日當地城丹靈藥學校の運動會なれば、朝來頗々とし

て殷々たる煙火天に轟く、宛ら大祭を祝するかの如くに……。

聖師様には午前十時二十七分着の列車にて壽賀廚様、宇知廚様御夫妻、尙江様御同伴御歸綾、その他各地の信徒、天恩郷在住の各信徒續々來綾。 停車場には聖師様一行を御迎へする爲各地方信徒は勿論在住信徒の御迎へ多く、驛庭の内外は信徒を以て人垣を作つた。 町内では各家々に十曜の神旗、翩翻として飜る。

朝の拜式は六時十分より日出廚様の御先達にて五六七殿、教祖殿、祖靈社と 平常通りの巡拜が行はれた。

至聖殿祭典

午後一時、第二報鼓が澄みきりたる秋の大空に鳴り渡る頃には、 既に參拜者は五六七殿を七分通り埋めて居た。 尙三々五々遲れ馳せに參ずる人々も多數あつた。 聖殿奥深く八雲琴の妙なる音律が流れ出すと、齋主日出廚様を先頭に祭員二十數名靜々と登殿、着座。 祭典は型

の如く、嚴肅が上にも嚴肅に始められた。海河山野の種々の神饌物二百臺餘り、文字通り横山の如く大前に供へられ、やがて嚴かに齋主の問え上げ給ふ朗かな祝詞も終りて、間もなく聖師様、二代様、三代様、壽賀齋様、宇知齋様御登殿。聖師様、二代様、三代様及高木内事部主事並聖殿に御昇殿、玉串は聖師様、次いで二代様、齋主日出齋様、一般代表として御田村天恩郷主事の順序に捧呈、終りて、聖師様の御先達にて一同神言奏上。かくて二時間に餘る祭典も無事に目出度く終り、聖師様、二代様、三代様及高木内事部主事並に祭員退座。引續いて宇知齋様の御先達にて神歌奏上。續いて井上總裁の挨拶あり、次いで北村宣傳使は聖師様支那御旅行中の歌日記を二時間に亘つて拜讀をなす。一方御神前にては昇任宣傳使三十三名新任宣傳使百二十三名に對しそれ〴〵辭令の交附ありて一先づ散會。

○

夕拜式なく、午後六時半より井上總裁より紅卍字會訪問のお土産話（十二月號神の國掲

載）ありて後、富士津宣傳使指導のもとに基本宣傳歌の練習ありて、十時過ぎ大祭第一日を終つた。

十一月三日　於教主殿

朝八時役員信者打揃ひ明治節祭遙拜をなす

快く晴れ渡りたる秋空に宣信集ひて教祖祭なす

山籠に搖られて二代と子の子連れ天王平に參拜を爲す

奥津城の庭の面清く生ひ茂る樹々の梢の美はしきかな
清庭に秋の陽映えて風清く天に轟く神言の聲
奥津城の廣庭埋めて宣信徒こゝろ清しく祭文を宣る
日出麿を齋主と爲して一同は教祖の墓前に祝詞のりけり
教祖神供へ奉りし神饌を宣信一同にバラ撒きにけり
歸り路月光閣に立寄りて山水の畫を四枚描きけり
日出麿を始め宣信一同は二聖殿祭參拜を爲す
夕拜を終りて一同五六七殿にくつろぎ支那の談し聞きたり

明光社擴張のため壽賀麿は五六七殿にて演說なせり
小夜更けて臨時冠句を五六七殿に開き一同歡喜に充てり
草臥て手足もまれつ教主殿に安く寢ねたり夢に入りつゝ

大本大祭概況

大祭第二日　十一月三日

大祭第二日は名物の丹波霧に明け、朝來快晴を豫想せしめたが、終日空は曇り勝で、時々雲の絶え間を洩れる陽の光が、風もない靜かな神苑を暖かく照らすのであつた。

朝拜は午前六時十分より日出麿樣の御先達にて行はれたが、みろく殿、教祖殿、祖靈社の巡拜所要時間は約一時間半であつた。

明治節遥拜祭

午前十時より五六七殿にて齋主湯川祭祀課長外祭員九名にて明治節遥拜祭が擧行された。日出麿様、三代様も御臨席遊ばされ一同神言奏上。明治大帝の偉業を偲び奉り感謝し奉るのであつた。因に玉串の捧呈者は左の如し。

日出麿様、三代様、齋主湯川貫一氏、參拜者代表井上留五郎氏。

○

午前十一時より豊の拜式に侍る。祭員は三名、齋主は湯川祭祀課長奉仕。先づ齋主湯川氏の先達にて一同神言を奏上し、後玉串行事あり、參拜者代表として藤田武壽氏恭しく捧呈、終つて一同神歌奉唱。

教祖殿祭典

午後一時の報鼓を合圖に教祖殿は文字通り立錐の餘地なく時の移るに隨ひ、參拜者は殿外に

溢れ教主殿前庭にも人山を築くのであつた。

妙なる八雲琴の奏樂裡に祭員十二名靜々と登場、着座。祓戸行事も献饌も無事に濟み、齋主日出麿様の祝詞御奏上朗かに終ると間もなく 聖師様は白羽二重の御召物を召され、二代様は上下揃ひの紫の御紋服を召されて三代様外 出口家御家族及御親戚の方々と共に御昇殿、御着座、直ちに玉串行事は聖師様から始められ、二代様、齋主日出麿様、 御親戚總代出口竹藏様、一般參拜者代表岩田久太郎氏の順序にて終つた。 それよ 聖師様二代様は正面の御神前に、三代様は稚姫君命の御前に、日出麿様は大八洲彦命の御前にそれ〴〵御着座あり 聖師様の御先達にて一同神言奏上。こゝに大本大祭教祖殿祭典は目出度終りを告げた。

教祖奥都城祭典

引き續く天王平教祖奥都城祭典に御參詣遊ばさるべく、 聖師様は操様、二代様は直美様をお抱き遊ばされ、三代様と共に各々御駕籠に召され、齋主日出麿様は、祭員四名と共に自動

車二臺に分乘せられて御出向。一同は思ひ〳〵に歩を運ぶ。

奥都城拝室前に一同暫時休憩。先づ聖師様は紫の紋服を召されて奥都城前に御出ましになり次で齋主以下祭員四名着席、次で二代様は三代様と共に御出ましになる＝三代様は直美様をお抱き遊ばされながら＝續いて出口家御一統様それ〴〵奥都城前近く御着席。

一般參拜者は威儀を正して奥都城前の廣庭に並列す。それより聖師様の御先達にて一同神言を奏上し感謝祈願の誠を披瀝した。引き續き出口家奥都城の御禮あり、尙聖師様は二代様齋主日出麿様以下祭員と共に輪王姫（一二三様）の奥都城に御禮さる、一同廣庭より遙拜。こゝに奥都城參拜も無事に終り、參拜者は隨意に御下りの御神酒やお餅を頂き、二聖殿祭典に列すべく歩を向けた、時に午後三時二十分。

二聖殿祭典

朝來曇り勝な空からは遂に淨めの雨が降り出した。參拜者は思ひ〳〵に雨に淨められ乍ら

二聖殿さして歩を急ぐ。

掃き清められた齋庭には山茶花が秋雨をあびてほろ〳〵とこぼれ散る。齋殿には既に海川山野の神饌物が美々しく供へられ祭典の準備全くなれり。

午後四時、齋主日出麿様、齋主補井上、東尾兩總務、祭員田中、成瀨の諸氏着座。祭典は例によつて例の如く、五時前終了。雨は全く止みて雲の絶え間に青空がのぞく。

因に參拜者代表玉串捧呈は森遠雄氏奉仕す。

○

午後六時より夕の拜式あり。先達は日出麿様、本夕に限り祖靈社の夕拜は代拜となり、みろく殿の御禮後直ちに岩田瑞祥會長補より明朝鎭祭さるべき御手代に就てお話あり（次頁記事參照）次いで壽賀麿様より大本文藝に就いて二時間に亘る有益なお話があり尙即席冠句題アタヽカイ、スクツテルの出題あり、〆切三十分、一人十句と限定され一同競吟、天國的氣

分に浸りつゝ九時半散會。

御手代御鎭祭に就て

岩田久太郎

明朝（四日）八時半大八洲神社へ御手代の御鎭祭がありますから皆様の御參拜を願ひます。

此大八洲神社へ御鎭祭になります御手代は、もと松村眞澄氏の所有でありまして、大正十二年の八月聖師様が、九州杖立温泉へ御出になりました時の御土產として我々初め一同が頂いたものであります。

松村氏は大正十三年聖師様御入蒙の時御伴を致しましたが、其時も肌身離さず此御手代を持つて居つたのでありますが、此御手代が不思議にも六月二十一日夜白音太拉の鴻賓旅館に於て聖師様の御一行が支那側の手に捕へられ、一旦機關銃口の前に立たれながら、萬死に一生

を得られた時の記念品となつたのであります。

支那側では盧占魁等と共に一行を銃殺する考へであつたものですから、此際取る丈け取れば取り得と云ふので、身邊のあらゆるものを掠奪致しましたが、どうしたものか此御手代一本丈けが鴻賓旅館に遺棄されてあつたのであります。

六月二十一日の夜一時頃鴻賓旅館へドヤ〳〵と澤山な人の足音がしたかと思つて居られるとそれは支那側の兵士が聖師様一行を捕縛する爲にやつて來たのでありました。此時捕縛されましたのが御一行日本人六名、支那人一名、蒙古人一名、合計八名でありました。一行は鴻賓旅館の庭前に引出され一列に立たせられ、聖師様と松村氏、萩原氏と井上氏、植芝氏と坂本氏と云ふ風に二人宛綱をかけ、掠奪した物品を轎車に載せて何處へか持つて行つて仕舞つたさうであります。

此時支那語の解る井上氏が、

『先生只今支那兵が我々一同を銃殺すると云つて居ますから、もう仕方がありませんナ』と云つて泰然自若として居たさうであります。此井上氏はもとは馬賊の仲間にはいつて居た剛膽な男であるが、改心をして聖師樣の入蒙一行に加はつたのであります。

聖師樣は『いよ〳〵キリストとなつて昇天すべき時期が來たのだらう。君達も虚の部下も皆天國へ連れて行つてやるから、君達は靈が離れぬ樣にするがよい』と云はれて死後の世界の莊嚴を話して聞かされたと云ふことであります。

澤山な支那兵の中を宣傳歌を歌ひ乍ら、白晉太拉の長い町を引廻され、兵營の門内にはいつたが、支蒙人二名は一行と引離され銃殺場へ送られたのであります。御一行六名は又營門を出て北へ〳〵と引かれて行きましたが、道の兩側には已に銃殺された虚の部下が澤山屍体となり大の字になり、血潮に染まつて倒れて居るのを見られたさうであります。

やがて一行は松村氏、聖師樣、萩原氏、井上氏、坂本氏、植芝氏の順序で一列に並べ、機

關銃でもつて銃殺に取りかゝつたのでありますが、銃に故障が起つたと見えて松村氏を撃つた射手がアベコベに銃の反動で引くり返つて仕舞ひ、銃の故障を直すのにゴテ〳〵と手間が取れたのであります。

聖師樣が『も早かくなる上は昇天の時が來たのだ、自分は是から天國へ昇り靈國天人となつて日本は云ふに及ばず世界の守護をする考へだ、君達もワシについて來い。そして男らしう撃たれやうぢやないか』と云はれますと松村氏が、

『先生、貴方は今天國へ行くと云はれましたが、今度の世の立替は肉体がなくては出來ない筈でありますから、もし貴方が此處で生命を取られるやうな事があれば、神樣が人間をだました事になりますから、私は屹度御助かりになるものと思ひます』と云つたさうであります。

聖師樣は

身はたとへ蒙古の野邊にさらすとも日本男の子の品は落さじ

いざゝらば天津御國にかけ上り日の本のみか世界守らん

日の本を遠く離れて我は今蒙古の空に神となりなん

と辭世の歌を詠まれましたが一向銃の音がしないので、次々に一行の連中に代つて皆の辭世迄もよまれたさうであります。

やがて大日本帝國萬歲、大本萬歲を三唱されましたが、とう〳〵銃の工合が直らぬので銃殺は夜に延ばすことゝなつて通遼公署附屬の監獄へ連れて參りました。そして一々堅固な手枷足枷を施し二人ヅゝ繋いで麻繩で縛り、窓を通して外の材木に括りつけ嚴重な死刑囚の取扱ひをしたのでありました。

話代つて鄒家屯の日本人稻田袈裟義と云人が恰度白音太拉の鴻賓旅館へ泊つて、ゆくりなくも遭遇してあつた此一本の御手代を拾つて聖師樣御一行の御危難を知り、一番汽車に乘つて鄒家屯の日本領事館へ急報したので、領事館では驚いて早速土屋書記生を急派し日本

人引渡し方を支那側へ交渉したのであります。

支那側では二十二日の夜改めて蒙古人として銃殺する考へであつたのでしたが、領事館から公式に交渉されましたので國際上の後難を恐れて銃殺を中止し無事引渡しを了したのでありまして、云はゞ此御手代は聖師樣の御一命を救つた尊い御手代なのであります。

今回の鮮滿御旅行中には御入蒙當時の關係者が御面會に來たり、不明であつた姓名が明白になつたりしたのは實に愉快な事でありました。現に此稻田袈裟義氏の如きも名前が判らず蒙古入記には單に日本人某となつて居つたので、豫て聖師樣が其名前を知りたいと考へになつて居たのでありましたが、今回の御旅行中はつきり判つたのであります。

十月二十二日長春へ御一泊になり、御宿は人類愛善會の支部長で北滿日報社長の箱田さんの御宅でありましたが、晩餐は道院側の御招待で當地一流の支那料理店賓宴樓へ招かれ御馳走になつて九時過御宿へ歸られましたが、御入蒙の當時鄒家屯で一晩聖師樣をかくまつた山

本熊之進氏が來訪され、當時の話がはづんで居る最中、午後十時頃であつたと思ひますが、ハルビンの支部長の中山長藏氏が鄭家屯から戻つて參りまして使命を全うし、稻田氏から受取つて來た御手代が首尾克く御手にはいりましたので、聖師樣は非常に御喜びになりました。親しく御手代を拜見しますと手垢がついて少しくよどれては居りますが、正しく杖立溫泉の御土產の御手代で、一面には

萬有の生命をすくふ此釋子心のまゝに世人救へよ

とあつて王仁の御署名の下に杖立の燒印があり御捺印が五つあつて裏面には

此杓子吾生れたる十二夜の月の姿にさも似たるかな

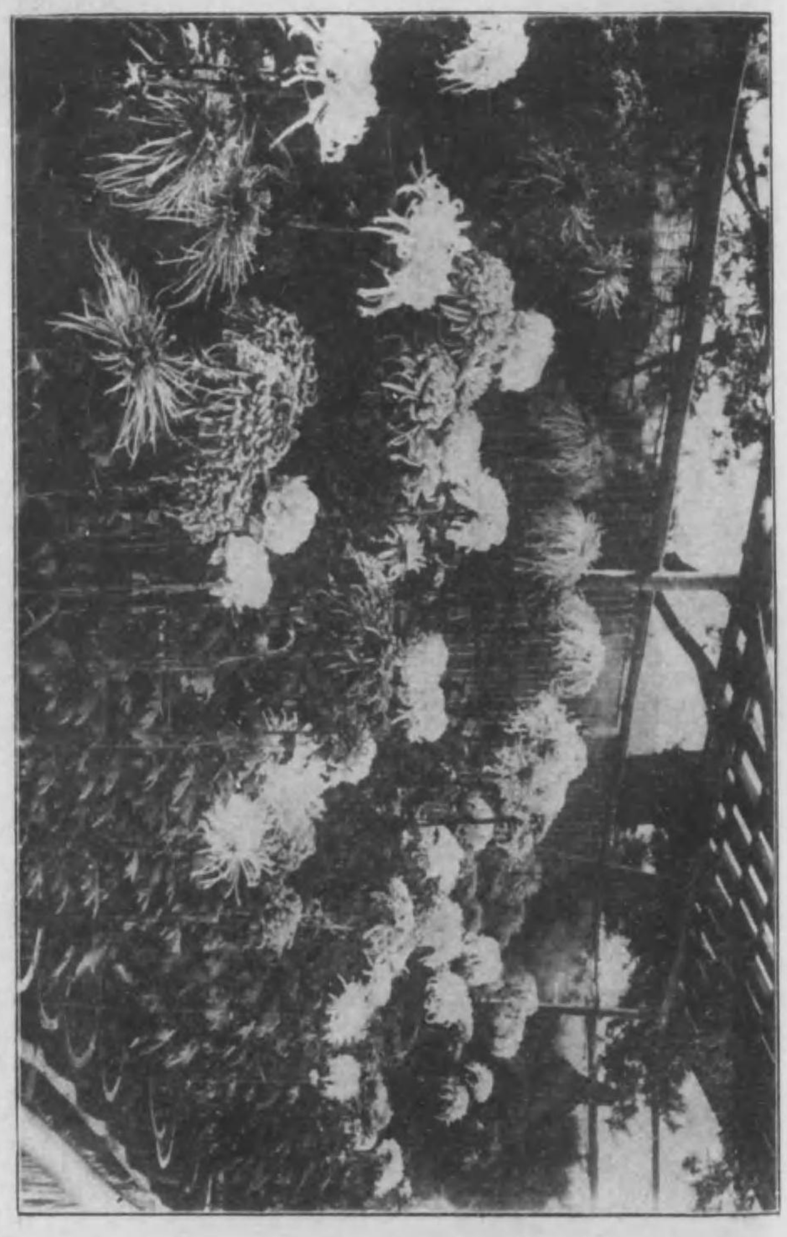
とあつて御捺印が三つ捺してあります(萬有の生命の歌は蒙古入記には『天地の身魂を救ふ此杓子心のまゝに世人救はん』とあります)。明朝奉齋されます此御手代は御神体でありますから假の御宮に安置し奉り、筆者が簡單に御手代の由來を書いたものを納めさして頂き、宮の

表面には御手代神社と御揮毫になりました。いづれ時期を待つて立派な御宮を作り御祭りになることゝ伺つて居ります。

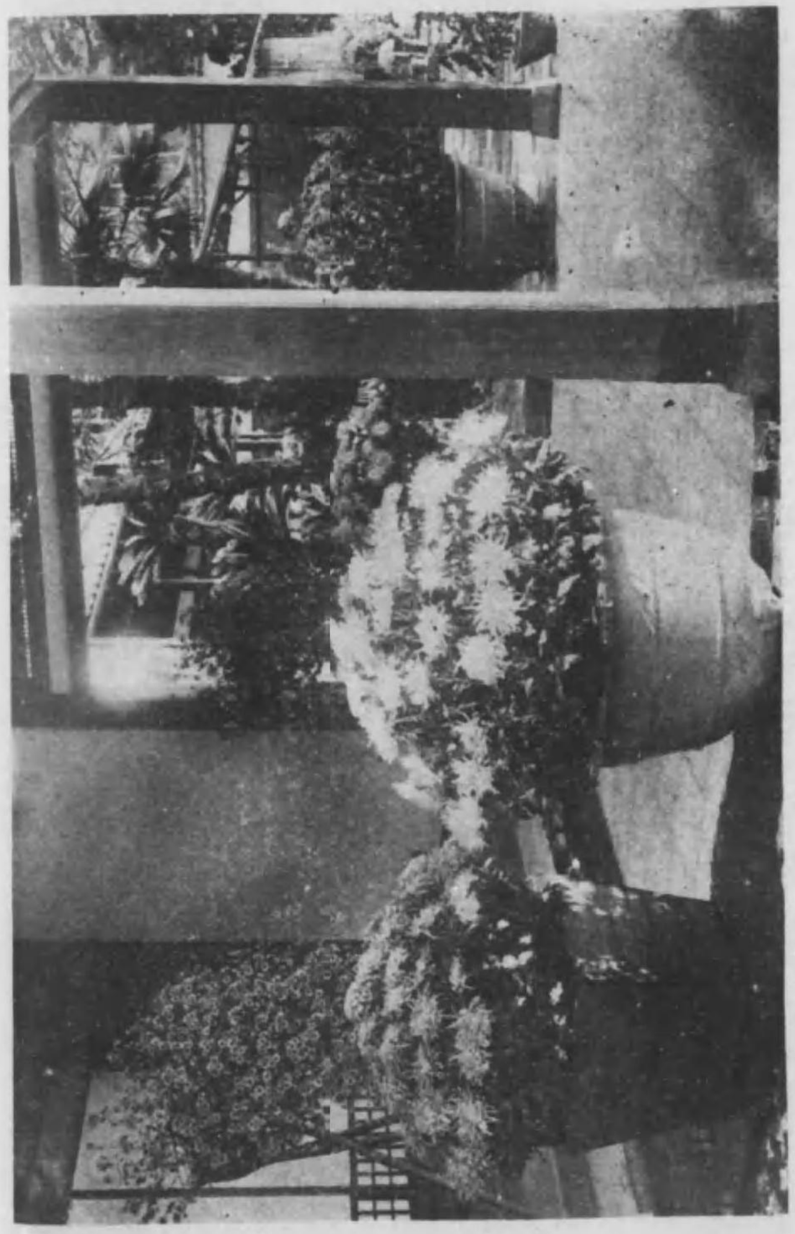
御歸途十月二十四日東支鐵道から滿鐵へ乘り換への爲長春で暫く時間がありましたので、驛構内の貴賓室で御休憩になりましたが、目下長春の日本領事館へ轉任になつて居られます土屋書記生がわざ〳〵御面會に來られ、奉天では、安奉線の乘り換へで又暫く時間がありましたので驛構内の待合室で御休憩になりましたが、こゝでは滿鐵公處に勤めて居られる志賀秀二氏が御面會に來られ、どちらでも當時の御話がはづみました。志賀氏は當時の居留日本人會長太田勳氏と共に逸早く聖師樣を御尋ねして御慰め申し上げ、支那側へ交渉して手枷を除かせた方であります。志賀氏の御手許には一行が縛られて御座る當時の記念の御寫眞が殘つて居るさうで、當時聖師樣が掠奪されなさつた天國の鈿と玉とは目下奉天の支那商人の手に殘つて居るらしいと云ふ御話も志賀氏から伺ひました。

○

尙ハルビンの話や東支鐵道食道内の失敗談等御話したいのでありますが、それは通信中にも一寸書いて置きましたからこゝには是を省略致します。



菊の栽培　花卿恩天



天照郷の菊花

十一月四日　於教主殿

朝八時半より船を浮べつゝ大入洲社に御手代祀る
蒙古にて吾危難をば救ひたる御手代今日より神に祀りぬ
分所支部聯合會を五六七殿に開會したり午前十時ゆ
引き續き賛襄會を相開き重要問題協議を爲せり
午后一時五六七殿にて直會の席に列して聖飯を喫す
第三日今日の祭りも秋の陽の暖かにして吹く風清し

秋の陽は庭の茂みを徹しつゝ、教主殿内疊に映えたり
神苑の樹々の梢は紅葉して秋陽うらゝに空澄み渡る
綾錦高天原の神苑に織り出す秋の美はしきかな
神そのゝ秋の景色を眺むれば天津御國の狀の偲ばゆ
さやかなる秋日の空に聳え立つ黄金閣の眺め妙なる

吾曾て蒙古遭難の際一命を救はれたる御手代を神靈として大入洲神社へ合祀したる祝詞文及び由來略記左の如し。

御手代神社鎮祭祝詞

掛卷母畏岐大神乃宇豆乃大前仁齋主出口日出麿恐美恐美母白佐久去志大正十三年止云布年仁大本乃敎祖瑞靈眞如聖師伊皇國乃現狀將來乎思布餘里仁皇大神乃大命乎恐美津々毛諸越也加良乃荒野乎打越衣天遠々志蒙古乃奥仁進美入里津留折志母パインタラ仁天由久利無久母忌々志支禍津神乃計略乃爲仁殆命失世奈牟止須留東乃間仁大神乃廣支厚支奇志支大御稜威止御手代乃御功乎蒙里奉里天事無久安良仁穩仁身全支乎得津留事乎嬉志美喜毛今日乃生日乃足日仁御手代神社止御名波稱方天御靈代乎鎮米奉里座世奉留狀乎聞食相諸比給比天献留海川山野乃種々乃多米津物乎平

介久安介久聞食世止白須如此聞食天婆自今以後彌益々仁御靈幸給方天出日乃家乃親族家族波更奈里大本乃御教仁服比仕奉留信徒乎始米顯志支蒼生賀禍津神乃禍事仁罹里天憂支瀬仁落天多志奈麻牟事有良婆常母惠麻比慈志美給布廣支厚支大御心仁伊加傳助氣給比救比給比天喪無久事無久心安久樂志久夜乃守日乃守仁守里幸方給方止恐美恐美母白須

由來記

此御神体なる御手代は大正十三年聖師樣御入臺の際六月二十一日の夜白音太拉の鴻賓旅館に於て支那側の手に捕縛され玉ひ、機關銃口の前に立たれ乍ら、

萬死に一生を得られし折の記念品にして、一行中の松村眞澄氏の所有なりしを鴻賓旅館に於て遺棄したる物なり。當時鄭家屯在住の日本人稻田袈裟義氏、ゆくりなくも同館に宿泊し、庭前に於て不計此御手代を拾得し、聖師樣御一行の危難を知り、驚いて鄭家屯に急行し、日本領事館に屆け出でし爲、領事館より土屋書記生を現場た急派し、聖師樣一行の引取方を强要せしめ、支那側にては國際上の後難を怖れて、其夜決行すべき銃殺を中止し、引渡しを了したるものにて、言はゞ聖師樣の御一命を救ひ奉りし尊き御手代なり。

昭和四年秋、聖師樣、二代樣朝鮮滿洲御旅行の際、哈爾賓支部長中山長藏氏の斡旋により、鄭家屯の稻田氏に乞ひ得、十月二十六日長春假泊の夜、めでたく御手に入りしものなり。十一月四日御鎭祭あるに際し其由緒の大要を略記す

ることと爾り。

○

天も地も心も澄みて秋祭

神苑や祝詞に晴るゝ秋祭

秋日和心すがしき神祭

天も地もさえ渡りけり秋祭

明治節秋の神苑風清し

夕陽かげ秋の座敷にさしにけり

花明山に歸らん時の近づきて綾部の驛に自動車馳せたり

一行は王仁、八重野、尙江、吟月、滿月、竹内照子、安藤照子、小久江しげ子、林宣傳使其他一行數十人、午後四時五十分綾部驛を發す、天氣晴朗にして夕陽麗しく本宮山上の穹天閣に映えて神苑に一層の莊嚴さを增す。

一本木踏切の小路に宣信徒うごなはりつゝ吾を見送る

掬水莊松雲閣や道の邊にハンカチふりて見送る人あり

錦照る山の麓を縫ひ乍ら山家の驛に早つきにけり

右左山はもみぢに包まれて清き谷間の水に映えつゝ

和知驛や下山胡麻ものり越えて殿田の驛のあたりくらけし
權現山電燈みえて吾汽車は早くも園部の驛にはひ込む
入木驛に來れば福島久子氏等別れを告げて急ぎ下車せり
天恩郷電燈かゞやく見えそめて早くも汽車は龜岡に入る
龜岡の驛をふさぎて宣信徒吾一行のかへりを迎ふる
自動車を二臺並べて天恩郷夜の神苑に歸りけるかな
分所支部會議後れて宇知麿は漸く八時の汽車に歸れり

大本大祭概況

大祭第三日　十一月四日

朝の拜式は前日通り午前六時十分より日出麿様の御先達にて行はれた。

御手代御鎭祭

大正十三年聖師様御入蒙の際、御一行をバインタラの遭難より救ひ出し、今は唯一の記念品となつて這般計らずも聖師様御一行と共に再び大本に返つた御手代（別項御手代鎭祭に就ての記事參照）鎭祭の祭典が八時半より大八洲神社に於て行はれた。

第一報鼓を合圖に集まつた參拜者は間もなく大和烏全烏を埋めた。 軈て八時半第二の報鼓が神苑に響き渡るや、齋主日出麿様によつて御手代は教主殿より捧持され、聖師様二代様、壽賀麿様、宇知麿様並に祭員四名と、御入蒙の際隨行した萩原敏明宣傳使を加へて十名、白龍丸に搭乘し、徐ろに金龍海を辷つて烏々を縫ひ、大八洲正前に上陸され直に社前に着座、茲

に祭典は始められた。祓式があつて御手代は齋主の手により宮殿深く鎭祭され、いとも朗かな齋主の祝詞が奏上される。此時水面には水鳥の悠々浮游せるあり、何處よりともなく飛び來つて社前の松樹に羽根を休めて居た一羽の瑞鳥の翔つて上空に高鳴ふあり、實に日出度さの限りである。かくて聖師樣、齋主、一般を代表して萩原敏明氏の玉串が捧呈され、聖師樣の御先達にて一同の神言が高らかに奏上されるや、空を封じた深霧は爰に晴れ初めて天津日の光晃々と輝き莊嚴裡に祭典は終了した。時に正九時。一行を乘せた白龍丸は聖師樣自ら棹さされて大八洲を一周し、水面に浮ぶ鳥影を縫ひ、靜かに船着場に歸つた。

○

間もなく九時三十分より五六七殿に於て分所支部長並に贊襄の聯合會合が開催されたが、今回は特に一般傍聽者も多く、穆かな内にも地方分會設立の議等が出で和合一致對外的進展の氣が横溢して居た。かくて閉會されたのは正午前であつた。

直會

聯合會合後畫の拜式が終ると引續き直會に移る。聖師樣、二代樣、日出麿樣、三代樣を始め壽賀麿樣御夫妻、宇知麿樣御夫妻、尙江樣、住ノ江樣等の御臨席にてオコヅ御神酒の直會が開かれ、神の家の和氣藹々として賑々しく、滿堂之れ一家の氣に醉うた。

○

直會後五六七殿に於て別項の如く二代樣のお話があり、終つて一時五十分より地方分會の催しがあつた。先づ神前に一同禮拜をなし躬頭瑞緯會長宇知麿樣のお話がつた。

お話終つて各地方別に定めの場所に集合し、座長を推薦してすく〳〵と逐條協定を遂げ、協議の終つた分會より解散し、午後五時前には全く終了した。

○

爰に綾部聖地に於ける大祭中の重なる行事は滯りなく終り、參拜者は四時五十分綾部驛發

の汽車にて聖師様のお伴をなし、或は之と前後して亀岡天恩郷へ向つた。夕の拝式は前日通り五六七殿、教祖殿、祖霊社と順次に行はれた。

二　代　様　の　お　話

大祭第三日　於五六七殿

此の度支那に參らして頂きましたことに就いて、委しいお話は井上さんや岩田さんに聞かれた事と思ひますので、私はほんの一口、感じさせて頂いた事や　非常に嬉しかつたことについてお話さして頂かうと思ひます。

紅卍字會のお客さんがお見えになりまして、初めはあちらへ行くつもりではありませんでしたが、急に行くことになり、思ひ掛けない大きな御用をさして貰ひました。

私はまへから一度支那に行つて見たい、行つて見たいと思つてはゐましたが、御承知の通

り支那の食物は油物が非常に多く、私の嫌ひなものばかりですから、愈々行く事に話が決まりましてから、一週間や二週間は食はいでもよいと思ひ、始め餅を五升程用意して貰ひましたが、二升だけついて貰つて持つて行く事に決め、岩田さんにこのことを話しましたら、岩田さんも『それはよろしからう』と言はれましたので、兎に角二升の餅を用意して出發ちました。所が日本を離れる迄は何の驛にも此の驛にも見送りの人達から澤山な菓子や果實を車に積む程貰つて、それは〳〵結構なことでございました。愈々日本をはなれて朝鮮に行きましたが、意外なことには、どこの宿屋に參りましても日本食ばかりで、いつも美味しいものばかり頂き大變結構でございました。これは豫て私があちらの食物は嫌ひであると言つてゐましたので、信者さんの眞心でかういふ風に取計らつて頂いたのであらうと感謝してゐます。道院でも亦日本食ばかりで、内地でもなか〳〵頂けないやうな美味しいものばかりの御馳走を頂きました。

斯うして行く先き〳〵で非常に歡待されましたが、殊に奉天驛では、大本の信者さんは勿論紅卍字會の信者さんや日本人や學生團等の盛んな歡迎を受けて、旗の行列や樂隊の中を通過する時なぞは、寫眞にでも寫して置き度い位で、實に勿体ない氣持になりました。

それから、あちらには道德社といふ婦人の團体があります。そしてあちらでは男と女との席が別れてゐますので、假令夫婦であらうとも、同じ自動車に一緒に乘る事は許されませんから私は女の席に迎へられましたから、男の方の事は全く解りませんでしたが、道德社の方々に、自分として恥かしい位すべての點によく行き屆いて世話して頂きました　私は今迄、支那人支那人と言つて幾分侮つた氣持をもつてゐましたが、此の度の旅行で全く裏切られて了ひました。といふのは、此の信仰の團体の方々がどの人もこの人もすべて誠の德つた、人をそらさぬ何ともかとも云へぬ、實に立派な態度に感心したからであります。この團員の方々は、皆有力者ばかり、つまり皆貴婦人ばかりでありましたから、特にこの感を深く味はしめら

れたのかも知れませんが、親切が顏や態度に溢れて、このいゝ感じはとても口で云ひ表はす事は出來ません。兎に角、大本の御婦人達に一べん見せて上げたいとつく〳〵思ひました。

日本の婦人は、一見圓滿らしう見えても、どこかに角があり、藤でこそ〳〵云ふ性質を持つてゐますが、支那の婦人は實に圓滿で親切であります。私があちらに居りました期間が僅か二三日位でありましたので、或は支那婦人の缺點を見出す事が出來なかつたのかも知れませんが氣分といふものはすぐに感じ得られるものでありますから、この點は間違ひない事でありませう。兎に角、遠方から見えられた時には、特に親切な暖かい感じを與へるといふ事は極めて必要なことでありまして、この親切なるものが神樣の大切な御用であるといふことをしみ〴〵悟らせて頂きました。

私は今度の旅行に於きまして驛々で信者さんがまごゝろの籠つた色々のものを、十里二十里の道を遠しとせずわざ〳〵持つて來て下さつた其の御親切を深く感じまして、今迄の精神

を改めねばならぬと思ひましたから、この大本に寄せて頂いて居らるゝ方々は男も女も、老人も若い者も、他から來た人には先づ第一番に親切を盡すことを忘れない樣に、特にお願ひして置きます。

大本は今迄とは違ひ、世界一つになつて和合し、心を一にして行かねばなりませんから、親切と誠を以てすべてにあたつて頂き度い事を重ねてお願します。

誠と親切がありさへすれば、世界の何處へ行つても、少しも恐ろしい事はありません。

此度の支那旅行でも、私には言葉は全く解りませんでしたが、道德社のどの人にもこの人にも離れたくない好い感じを與へられたのは全く誠と親切の賜であります。

支那の婦人は頭が進んでゐて、殊に女が餘り偉過ぎる爲に男の方から之を抑へつける事に努めたといふ事を聽て聞いてゐましたが、實際支那婦人は非常にかしこくて親切で、和合の道へとどん〳〵進んでゐます。私は外國でさへもこんなものだといふことを神樣が見せて下

さつたものであると、有難く感じさせて頂きました。

とにかく結構なことばかりでありました。

○

それから、安東縣に七八名の道德會員に迎へられましたが、その中の一婦人は、日本の長崎に來てゐた事があるといふので日本語が解るさうで『何んでも御用があれば私に話して下さい』と言つて非常に親切にもてなしてくれました。

また奉天では、何百人といふ樂隊入りの歡迎の中をステーションに下りると、その中に十四位の女の子が第一番に私の手にとりすがり、私の紋とあなたの紋とが同じだと言つて非常に喜び、私の側を離れようとはしませんでした。この子は非常に賢い子でありまして、日本人の中にでも珍しい位よく氣のつく子供でありました。

○

それから道院に行つて宿屋につきましたが、それは〳〵大きな旅館でありました。そこへ道德社の方から二三回も迎への人が來ましたので、その方へ顔出しゝました。所が大變な御馳走で何でも五十種位の料理が並べられました。どれもこれも珍らしい物ばかりで、むかふ側では神樣の御出でといふので、出來る限りの御馳走をし、あらん限りのもてなしをし、ダシなどでもすべて肉類を使はず、私共の口にあふ樣なものばかりで拵へてありましたので、私は一口づゝでもと皆に箸をつけようと思つて氣張つてをりましたが、次から次へ御馳走が出されるので御馳走の出される毎に、かなはん〳〵と思ひ、ひや〳〵するのでありました。がさてお話することになると、神樣が御使ひ下さると見えて、それはとてもうまく話が出來ました。例へば私は支那の言葉は少しも解りませんが、先方では『あなたの心が私の心によく解ります……』といはれた婦人がありました程で、非常に心安くなつて、あたかも姉妹とでも話をしてをる樣な溫い氣持となつて色々な話をさして頂きました。向ふの方々も非常に喜ば

れて、是非日本に行きたいと云はれますので、來年の春、櫻の花の咲く時分團体で是非々々お出なさいと約束して來ました。後には、これはくち、これははなといふ風に、顔や身体の名前を日本語で說明し最後に『あなたの國は佛樣を拜んで居られるが、私の方は昔からの習慣で神樣を拜んでゐるけれども神樣と云ふも佛樣といふも元は一つであるから、お互に力を併せて神樣の爲、人類の爲に大いに活動致しませう』といふ工合にお話をして、大變結構な結果を得さして頂きました。

實際、向ふの國は大きな〳〵國で、とても廣い〳〵原野があります。この支那の國と日本の國が仲よくせなければ、將來日本の發展は望まれないのであります。

○

それから奉天は日本人や露國人や其他色々の人種が住んでゐますが、此の度紅卍字會との提携の出來た事を在支邦人が非常に喜び、鼻が高くなつたと云つて居りました。

元來支那人は他國人とはなか〳〵握手せないさうでありますが、此の度の握手を見て、皆あきれてゐました、と同時に、信仰を持たない人までが非常に喜んで居ります。

○

小さい〳〵お筆先の取り方をすると、これからは見當のとれん事になりますから、お互はお筆先を充分腹に入れさして頂かねばなりません。お筆先にもあるやうに

『神も佛事も人民も、勇んで暮す世になる……この方計り世に出て喜ぶやうな神ではない』

でありますから、これからは益々大きな心でゐてもらはねば神心にそはない事になります。

○

さつきお話しました十四才の女の子は、三日間私の側を離れませんでした。そしてこれから日本語を稽古して、手紙を出すから御返事を下さいと言つて居ました。また日本の學校に行くからその時は小母さんの所へきつとお訪ねする等と云つてゐました。そして金銀で出來

てる松竹梅の床の置物をお土產にくれましたから、私も日本服を拵へて送つてやらうと思つて居ります。

この子はいつもニコ〳〵して痒い所へ手のとゞく位よく氣のつくかしこい子供でありました。

○

兎に角紅卍字會は、神示に對して絶對服從であります、これでなければ決して御神德は頂けません。こちらも其の通りにさして頂かねばならぬ時期となりましたから、よろしくお願ひ申します。

◇民國十八年十一月四日　上海申報所載記事

日人來華宣傳大本敎

日本大本敎頭王仁三郎到東北希圖煽惑道敎、夢想建中華王國於中國北方、魯紅卍字會有人助王仁、聞將到平津、查王仁曾經張作霖獲住驅逐出境有案。以上

十一月五日　於高天閣

朝まだきより神苑は信徒の祝詞の聲ににぎはひにけり
月の宮御前に集ふむらすゞめ聲も冴えたり朝晴の空
拍手の音あちこちに響かひて神苑の朝風澄み渡る
虫の音はいつしかたえてむらすゞめ聲にぎはしき神苑の朝
ぎんなんの梢に來なくかさゝぎの聲冴え乍ら朝晴れ渡る
霧の海おし分け昇る天津日のかげおぼろなり春景色して

何となく心清しきこの朝白菊かをる高殿の庭
智照館記念の寫眞印畫をば選みて秀作佳作をきめたり
朝六時綾部をたちし二代一行天恩郷に無事につきたり
輕微なる風邪におそはれ湯に入りて益々鼻をつまらせにけり
光照殿展覽會の繪を見んと到れば信徒うごなはり居り
或人の言葉もたらし安藤氏小久江氏二人東より來る
大祥殿神の御前に宇知麿は齋主となりて祭典を爲す
大祥の御殿の内外うづめつゝ宣信秋のみまつりに列す

智照館昇りて見れば寫眞印畫あちこち壁に張られありけり
高天閣入雲の聲もさや〳〵に月の宮居のみまつり清し
宣信徒月の實座を埋めつゝ菊の神苑に太祝詞のる
宣靈舍祭も無事に相濟みて大祥殿に直會もよほす
次々に宣信數多とひ來り高天閣の多忙なるかな
夜に入りて明光殿に卷開き景品かゝんと出でゆきにけり
高殿を渡る夜風にあてられて風邪ます〳〵はげしくなりけり
近侍子に腰を押されて階段をきざみつ高天閣にかへれり

吟月の歌の吟聲聞き乍ら高天閣にやすくいねたり

大本大祭概況

天恩郷

祭典及び會合

大祭第四日　十一月五日

午前八時半より大祥殿祭典行はる。珍らしく打續いた晴天に、大祥殿内に入りきれないで外から拜禮する人も中々多くて參拜者凡そ八百名と思はれる。

齋主字知麿様以下祭員九名にて祭典は進められ聖師様、二代様、日出麿様、壽賀麿様の御臨席あり、直ちに聖師様、二代様に續いて齋主、役職員代表井上留五郎氏、一般參拜者代表東

島威之吉氏の玉串捧呈があつた。

大祥殿のお祭に續いて月宮殿の祭典が嚴修されたが、今回特にお許しありて一般參拜者は月宮殿庭内に入りてお禮した。(玉串捧呈＝聖師様、齋主、役職員代表御田村龍吉氏、一般參拜者代表栗辻忠造氏)これに續いて郷内の巡拜あり、更に宣靈舍の祭典があつて直會に移つた。

直會は十二時より大祥殿にて聖師様、二代様、日出麿様、壽賀麿様、字知麿様御臨席のもとに催され、參會者はお下りの御神酒と折詰に十二分の歡を盡した。直會終るや聖師様のお言葉により梅田寛一氏起つて一場の講演を試み一時散會。

その後は暫らく月宮殿を拜觀する人々、新築の智照館に印畫展覽會を觀る人々、光照殿に御作品展覽會を拜觀する人々、さては各所に陳列された菊花壇を覗く人々、天恩郷を埋めつくしたやうな賑やかさである。

午後一時より宣傳使會合大祥殿に開かれ、今回に限つて特に聖師樣の御臨場なく、日出麿樣、宣傳使會長井上留五郎氏、瑞祥會長出口字知麿樣のお話あつて閉會。

午後三時より同會場に人類愛善會打ち合せ會あり、字知麿樣、總本部幹事萩原敏明氏、同委員宇城省向氏、島根縣の西村昭彦氏、綾部森速雄氏、東舞鶴支部委員岸本氏の報告、希望感想談などあつて閉會。

更に續いて更始會役職員の相談あつて午後四時半散會した。

一方では明光殿に於て午後二時より玲月社長のお話及角力冠句の催しあり、夜は例の如く明光殿に天國氣分の卷開きあり、又大祥殿にては各地のエスペラント運動ローマ字運動に活動される人々五六十名の第一回の懇談會が開かれた。

○十一月五日　眞如能光掲載記事

○總裁作品展覽會概況

京都

四山秋たけなはにして藝術鑑賞の好時機、十月十五日より十九日迄の五日間、京都分院に於て、本誌前々號掲載愛善會總本部計畫になる總裁作品書畫樂燒等參百餘點の展覽會を催せし處、毎日參百名餘の入場者をみた。

入場者は齊しく總裁入神の藝術に驚異したが、中には楊柳觀音の前に三十分も坐り込み熱心に是を鑑賞する人あり、齋入の樂燒を見て早速信者たらむ事を申込む茶、生花の師匠もあつて、何れも敬虔の態度で感嘆せざるはなく、別室にて宇城宣傳使の總裁の御人格の說明を聞き愛善新聞の購讀申込者多數に上り、極めて有意義に閉會した。入場者總計一千五百六十名左に重なる鑑賞人の逸話を記述す。

目下京都在住の人、吉岡治郎助氏は明治三十二三年頃宇津駐在所に居たる事ありて、總裁

の牛乳配達されし頃の事をよく知りゐられて「とれは果して出口氏の作品ですか」との奇問を發せられ「私の知つてゐた頃は全く書も畫も書く人ではなかつた。隨分當時は巡査の職權をふるつて出口氏をいぢめたものです。こんなに立派な書や畫を書く樣になられるとは夢にも思はなかつた。實に見上げたものです。全く今迄見損なつてゐました。出口氏に皇典講究所に入る樣に私が勸めたものです。私はその後三十年間も氏とは會はぬが、早速昔のお詫び旁々御面會に行くつもりです」と昔語りに感慨無量の態で立去られた。

或人は七福神の福祿壽十二の子供を引連れた畫は月樵の筆其儘だと評した。月樵は總裁の遠緣に當る方の由である。立達勝樣は富田溪仙筆にそつくりとの事、流石美術の中心地だけあつて批評も仲々適切で十二分の鑑賞を得、何れも多大の感興を湧かしめた。

總裁作品展日程

十月廿三日——廿五日　豐橋　廿七日——廿九日　名古屋

十月廿七日——廿八日　八木　十一月八日——十日　濱松

十一月十二日——十四日　見付　十六日——十七日　烏田

二十日——廿二日　藤枝　廿四日——廿五日　燒津

廿九日——十二月一日　靜岡　十二月五日　伊豆

園部

十月廿一日園部町公會堂に於て總裁作品展覽會を開催した。前日來町内の各處に立てられた掲示を見て總裁の作品に接せんと定刻前に參集する人多數に上り、入場するや皆默々として書畫より放射される威光に打たれざるなき有樣であつた。十時會場滿員、早速この盛況をフイルムに納める——。

午後三時山下町長、山口榮之助氏、淺井儀太郎氏外町内有力者及び郡是製糸園部工場長平野氏來場、主催側幹部と共に記念撮影をなす。午後九時閉會、入場者約六百名。

豎廿二日、今日は昨日にも增しての人出である。觀る者一人として感嘆せざるはなかつたが、中にも法釋寺住職の如きは「是は立派な作品だ、傑作だ、眞に無我の境に入つてゐる」と只茫然自失の態であつた。又京都府立美術學校前教授上野守之氏の如きも「批評を許さない」と一言の批評も發せず感銘深き面持であつた。

この午後會長宇知麿師の御入場あり、口丹波支部長會にも御臨席あつて夕景御歸龜になられた。

夜七時より展覽會終了と共に人類愛善會講演會開催。藤坂博氏の開會の辭に次いで吉原亨宣傳使「愛善と感謝」と題して講演があつた。氏の熱辯克く人を感動せしめ、次いで岡部町會議員山口榮之助氏の感想談あり、小谷義治氏の閉會の辭にて講演會終了。

短期二日間の總裁作品展覽會は千數百の人達を限りなき感激に醉はしめて目出度終了した

（岡部支部記錄係）

久留米附近

○十月六日、七日　三井郡北野（瑞祥會三井支部所在地）　會場＝同町天滿宮社務所

觀者何れも總裁の多藝多能なるに驚かぬものなし、來觀者の主なる人の中、同町々會議員にして學務委員なる某氏に極力愛善運動の緊要なる事を力說、諒解せられたり。新聞記事を見て久留米より來觀せる特志家あり、時間外迄鑑賞されて總裁の神格を認められ大本の大要を求めらる。三井支部員、天滿宮神官極力活躍されたり。

來觀者、六日約二十名、七日約四十名。

○十月八日、九日

自　午前九時　　至　午後六時

浮羽郡吉井町（瑞祥會浮羽支部所在地）

會場＝同町渡邊、田村法律出張事務所

町會議員、醫師、學校教師等熱心に參觀、一々說明を與ふ。新聞記事により遠方より來觀せる人數名あり、皆總裁の偉聖なるを諒解さる。

來觀者、八日約五十名、九日五十名

○十月十日、十一日

自　午前九時　至　午後七時

三井郡本郷村（愛善會支部所在地）

會場＝同村中垣博雄氏宅

土地僻在の爲め來觀者少數にして十日約十名、十一日約四十名。

○十月十二日、十三日

自　午前九時　至　午後十時

八女郡上妻村新講院

會場＝同村渡邊辰次郎氏宅

渡邊氏は假奉齋せる一信者にして農及製紙業を營まる。同氏の熱心なる活躍により來觀者は同村の有力者多し。同村々長は御作品の神韻漂渺なるに頗る驚嘆され、尙說明により愛善運動の主旨に贊同され今後の盡力を約さる。渡邊氏の熱誠によるものか大本皇大神の御神號（展覽の掛幅）に對し來觀者は村長もその他の人々も禮拜され又は奠錢を上げる者多し。

第二日の夜は來觀者多く、何等か詳しき說明を求め度く去り兼ね難き模樣につき、遂に八疊二間打通しの部屋にて來觀者約五十名に對し、聖師樣の偉大なる御神格、御事業、愛善運動の必要等約一時間半に亘り講演、大いに諒解を得たり。

渡邊氏の御盡力により愛善會支部設立に決せり。

來觀者、十二日約四十名、十三日約六十名

○十月十四日、十五日

自　午前九時　　至　午後十時

八女郡川崎村山内

會場＝同村新屋樓上

小學教師八名、黒木町神宮某氏等有力者多く來觀。佛教信者にして熱心なる釋尊萬能論者あり、夜十二時近く迄説得し諒解を得たり。

第二日夜又々來觀者多く、約四十名に對して講演約一時間半。前夜の佛教信者も聽講され遂に兜を脱がれたる模樣なり。愛善會支部設立に決定。

來觀者、十四日六十名、十五日九十名。

○十月十六日、十七日

自　午前九時　　至　午後六時

三瀦郡大善寺

會場＝同村玉垂神社境内青年會場

同神社神官及下川氏の盡力にて開催。來觀者に一々説明を與へたれば聖師様の御神格に對し、今迄の誤解の大なるに驚かれ、特に同村在郷軍人分會長の如き直ちに靈界物語を註文されたり。

來觀者、十六日約四十名、十七日約六十名。

○十月十八日、十九日

山門郡城内村

會場＝城内村公會堂

當地方は全然神光の至らぬ處なるに就き特に開催する事とし、愛善新聞讀者、同地神官山口徹雄氏に依頼して同氏の盡力を煩はしたり。幸ひにして同地柳河町沖ノ端等の一流の人士の來觀多く、殊に有名なる酒家某氏來りて非常に嘆賞され、その人の賞讃により來觀せる人

も多數ありたり。又京都に於ける公判を傍聽したりといふ僧侶らしき人 頗る熱心に鑑賞され實に立派なるものなりとて舌を捲かれたり。見本の『淨土眞宗をぬけ出でゝ』を是非貰ひ度いとて持ち行かれたり。立花伯爵家に出張されし某博士及び屬官數名の來觀あり、說明するを得しは幸ひなりき。同博士は作品を頂けるやとの質問あり、餘程頂きたかりし樣子なりき。

尙愛善會支部設立の見込みなり。

來觀者、十八日約六十名、十九日約八十名。

○

豫定せる如く日程を進める事を得、且つ作品に對して些かの不都合もなく好結果を得しは全く御神助と感じたり。又凡べて來觀者は聖師樣の非凡なる事は充分に諒解されたるものゝ如し。

出版書籍殆んど全部、新聞雜誌繪はがき等を陳列したるも非常の効果ありたり。

展覽物

久富氏御預品畫幅十二幅、久富氏拜領品書畫幅帖十二點　（久留米飯田豊實報）

◇十一月五日　北國夕刊新聞所載記事

活氣橫溢の

大本秋季大祭

一躍世界的宗敎となる

京都府綾部町に本部を有する大本敎では二日より四日迄秋季大祭を執行し更に龜岡天恩郷では四、五の兩日執行された。滿鮮の巡敎を終へた出口王仁三郎師、二代敎主は二日午後一時綾部の五六七殿の大祭に臨まれたが、全